





雜書及白話叢書秋總目錄

秋一上

文自初	立秋二	今秋三	未秋四
初秋五	七夕六	星逢七	星逢八
星秋	星夜	別星	天河九
烏鵲橋十	秋象	梔子	芋栗象
立琴	七夕鞠	池坊立花	逢峯入十一
北亭亮賣	夏市	刺結	逢障
追火	魂待	菟追	魂象十二
盆	于蘭盆十三	柳徑	養象
瓜馬	芙蓉子	蓬飯	麻木著十四



題叢目錄



灯籠	切葱	撰待十五	躍
生身鬼 十六	盆月 十七	送火	盆子 十八
龍餓鬼	大文字火	妙法火	舟形火
地蔵盆	衝突入	養父入	一草
柳散 十九	楸皮	摘衣 廿	龍尾草
桔梗	藜 廿一	木槿 廿五	草花 廿五
女郎花 廿六	茶花 廿八	萩 廿九	萩 卅二
蘭 卅三	藤袴 卅四	芭蕉	旋覆花
芥子菜	角觥草	仙翁花 三五	菜花 卅五
菖草	曼珠沙花	灸花	子日紅
益母草	若花	刀豆	藜

絲瓜 卅六	西瓜	蕃椒	木瓜實
蓬実花	秋收	秋提 卅七	秋際
秋虫 卅八	秋障	蛸	蜻蛉 卅九
虫送 卅一	虫 卅一	松虫 卅三	鈴虫
蛸虫	冬蛾 卅一	蝶 卅三	桑立虫 卅四
蛸 卅五	蠶 卅五	兼虫 卅五	虫賣
虫送 卅六	蟻 卅六	虫 卅六	藻 卅六
蠶 卅六	蟻 卅六	居 卅六	粒 卅六
鳩 卅六	初鷹	附公鷹	鷹心別 卅七
鳩 卅六	荒鷹	鷹 卅八	殘暑
小鷹	於園 卅八	鷹 卅八	露 卅三
扇置			



稻妻 辛四

初嵐 辛六

秋風 辛七

新田原 辛

相撲 辛一

花火 辛二

不知火

秋之中

八月 六三

正月

竹妻

八朔

田向 辛四

八朔梅

徳新器

辛府系

吳彼系

初月

二月

二月

夕月 六十五

待宵

待宵雨 辛六

名月 六十七

今日月 七十一

新月 七十二

月令宵

名月雨 七十三

月夕月雨 七十四

雨月

十六夜 七十五

既月雨

宵月 七十六

宵月

立待月

外待月

月 七十七

秋月 八十

月尺 八十二

月秋 八十三

稻花 八十四

稻

早稻

晚稻

稻刈

落穂 八十五

毛尾

稻舟

稻莖

吉莖

稻垣

燒米

新米

田守

米 八十六

木犀花

芙蓉

檀特花

紫苑

鳳仙花 八十七

菊頭花

雁来红

鬼灯

縹石草

白粉花 八十八

秋海棠

菊上戸

獨活実

菊花

黄穂

花中

薄 八十九

花蓆 九十二

尾花 九十三

芒藁

雀麦

蓆花 九十四

露草

野菊

若烟草 九十五

糖草花

牛房花

水引花

芍



葛	烏瓜	葡萄 九十六	冬瓜
秋茄子	芋	零餘子 <small>又カコ</small>	茼蒿花
向引菜	芥子菊	粟	粟刈
黍	蜀黍 九十七	蕎麥花	蕎麥刈
新蕎麥	菜蠅	着根蠅	木賊刈
初汐	屯分 九十八	二百十日 九十九	後彼骨
效生云	約摩 百	約追	出代
擣衣 百一	葉山子 百三	鳴子 百五	多却 <small>替</small> 百五
引板	漆多	燒帛	落水
<small>ウツガハ</small> 坐守 百六	肌多	樹多	船多
夜多 百七	露多 百八	秋多	下吟

吟	夕入	秋白 百九	秋多
长为 百十	秋多 百十	秋物	鴉
鴨 百十二	燕 百十三	鴉 百十四	鴉雀
初雁	雁 百十四	美喰 百十六	小多 百
久多 百十七	標多	鴨 <small>ヒトリ</small>	環 百十八
小雀	山雀	四十雀	鴉 百十八
頰白	頰赤	鶺鴒	菊戴
啄木多	鴨	鴨子 百九	左刀魚
鯽 <small>ニギ</small>	沙魚 百	紅鮭	初鮭
鰯	鰯	小鰯 百十	淡鮭
落鮭	崩藻	鮫入 完	廉 百廿一

題叢目錄



麻苗 百廿四

秋之下

九月 百廿五 长月

栗 百廿六 後籜

栗 百廿七 十月菊

白膠木 百廿八 檉 百廿九

楸 百三十 桑 百三十一

浪杏 百三十二 杜山 百三十三

星月 百三十四 郎 百三十五

星月 百三十六 郎 百三十七

星月 百三十八 郎 百三十九

重陽

菊 百四十

初 百四十一

秋 百四十二

合 百四十三

秋 百四十四

末 百四十五

秋 百四十六

秋 百四十七

菊 百廿六

菊 百廿七

菊 百廿八

菊 百廿九

菊 百三十

菊 百三十一

菊 百三十二

菊 百三十三

菊 百三十四

水之 百一

今 百二

栗 百三

熟 百四

合 百五

檉 百六

核 百七

山 百八

草 百九

思 百十

芦 百十一

九月 百一

渴 百二

固 百三

淡 百四

柚

梨 百五

菩 百六

木 百七

牡丹 百八

万 百九

美 百十

温 百一

温 百二

推 百三

空 百四

抽 百五

柿

菜 百六

梅 百七

葱 百八

吾 百九

豆 百十

新 百一

木 百二

枳

九 百三

拓 百四

板 百五

南 百六

常 百七

然 百八

芦 百九

鞞 百十







胡立や白湯色も艶業院  
 子実の小立に胡の立りお  
 胡立やいかにささるゝ家根のり  
 胡立りつゝいかにささるゝ第ノ丸  
 胡立や萩心楸一の立のうして  
 ささるゝと胡立新の木城の  
 ちりりや胡立非のわれ雀  
 胡立や蓬の葉の池のり  
 出さるゝや秋立新の小高人  
 出さるゝや秋立新の立り  
 出さるゝとつ胡や木槎の花の立

瓜 白 感 保 不 祐 士 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜  
 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

けりちりと眼に胡来わやわ雀  
 われ萩のりけ胡の立り  
 胡立や芦辺をさしてゆく雀  
 胡立や折しるゝやう取とけ  
 序ささるゝと胡の立り  
 胡立やあいにさるゝの尻袋  
 森に遠胡立道のり  
 道のりささるゝと胡の立り  
 胡立て二時ささるゝ白取  
 胡立や白戸ぬれハ折の立  
 胡立や松のふりハ戸口まで

標 雀 来 可 来 眞 大 日 道 岳 長 標  
 雀 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸



その方の心たよりを鳩立は  
鳩立や氣を控し輝の赤  
立鳩のすしを乳とて訂も朽る寸  
鳩立てるるを扱上類り乳  
余ふうまのや鳩立米の元  
秋立や乳とてふれは新の松  
秋立や米虫の羽の控は  
左鳩のふを説へ 芝 著  
とれ入る四又花より鳩たちね  
心星や菟薺の赤も鳩の立  
はとむしとるたやうに秋立て

出母 有講  
陸奥 阿量  
陸奥 子介  
紀伊 雄啄  
紀伊 薄左  
志守 卓池  
三原人 養元  
鳥原 亞度

今秋秋

自はら中に鳩立はるる落るれ  
鳩立つといをけ小塚の赤の運に  
うつろきあにふてや鳩の立  
あつた人の筆を喰むと秋の相  
鷲一羽立てて見やうりもその相  
赤立に追つれきりけその秋  
市中やけ見るともあけその秋  
けその相死すと穿く一人に逢  
堂の赤着る乳やけその相  
曉の赤も時とてけその秋  
と秋鳩とくそつと男わ

出母 存義  
陸奥 松鳩  
陸奥 梅調  
紀伊 折尻  
今 杉村  
鳥原 鳥碑  
鳥原 曉臺  
今 凡菴  
鳥原 存義

願葉秋







秋

高し良のひりも見よはまの娘  
とふ娘と出て見よんたこりり  
掃てゐる木の葉を足で踏むの秋  
灯のともる娘の事りり  
朝の光に秋の葉は夕の汗の味  
来る娘の姿もさだかと思はる  
来る娘に衣やとりは違ふ物や  
来る娘や志はしき清きつら  
そと娘の来るやんか鳴るわ  
熊巻のうらうら秋の来にる  
汁の月七すいと海へて秋は

伊良 子  
閑竹  
抱石  
南尺  
標中  
月是  
養乳  
塊菰  
柑翠  
秋長

初秋

初秋や腮さけりり 生者  
初秋や序管けしな 人  
初秋やよその火見ゆる者の片と  
いそぐと秋に成たるんがれ  
初秋のそとくことり言わ  
初秋のそとくいきりまがれ  
月のそとくよの葉を娘の印が  
初秋の川流にたてる小巻が  
初秋の麻にたてる道 くれ  
うらうらと初秋のうらうら  
初秋の老母をけくるまがれ

晚臺  
白梅  
五柳  
保吉  
悠喜  
又明  
士郎  
公  
公  
恒丸

題叢秋



末の寄うつに秋をほしめり  
 多うんとして初秋のふりまの  
 初秋や露の折著あまう風  
 とう胡をひくふりまの秋わ  
 心里にほしめ秋ハちりりまの  
 初秋の来ても月をまをこわ  
 初秋の麻おにたり 露のま  
 初秋に中れりなり 且 小  
 初秋とよりふふし炭のま  
 初秋と動る秋のなりしめわ  
 初秋とまにまのなりりれ

公  
 樗也  
 子粒星  
 女  
 白柳  
 道老  
 岳輪  
 奇倒  
 魯源  
 鞠風  
 花風  
 雪笠

七  
 初秋とまをまもるてまにる  
 世の人の初秋にぬる園家か  
 初秋と見にぬる良の小麻か  
 初秋やまのうりむく 笠 埃  
 初秋のふりり風下ぬ 費のま  
 初秋や心の風花のくくろろ  
 秋もくや二方赤に入る 松の風  
 木の股に初秋れる ちりりり  
 子の戸や内て控えて 娘にすら  
 井よりり中 露ろくろん 女七り  
 七々や 植に 寄ハ 月 露一

菱さう  
 長島  
 漫々  
 蒙心  
 柑翠  
 珠園  
 月秋  
 子崖  
 峯林  
 曉臺  
 白燈

題叢秋







星ふつと正人念く動令より  
星合やをく人虎のちをくす  
星今个新とるあに人の老  
星子片やと平人のた鳴戸一鶴  
ふくく力もすくは星と骨  
日ふりしはよふをりもく早と骨  
秋のちを星は通ふに遠る  
故きをん星言の聞れとと平人  
片しちややさもるさの系 芒  
そのおの星もくくれて更にり  
星まろや鬼もすじいほつす

善翁  
沙苑  
五穀里  
一草  
道亮  
今  
兼北  
月尾  
乙二  
月化  
一葉

〇七

星の悪いこと月ヶ入り  
いさくさの色にぬれや星一夜  
ふくまをくセ星子片人星の表  
花の色ををにちけて星と骨  
二ッ星白の濡れろくちんそ  
鶴の葉もくろくや星の乳  
牛控て在にけをを二ッ星  
星の灰やさやうれ飛 芒  
我れん扇流とん星はく人  
星源より善翁くく右前もくし  
ふんごしに善翁くくして星 源

長高  
善源  
志字  
平尚  
幽嘯  
其吹  
林園  
依海  
院臺  
柳莊  
一葉

題秋

星

源







塚の形もさうもあつては  
ての何廣いふらありまう  
道中の常よりしてその何  
秋の夜もや長くと況 何  
境ゆけハ世にさうさうの何  
ての何故一すちの夜のさうさ  
清さう風まのたさきまて何  
出あつたハさうやあつて何  
一節の何ん 既さうの何  
天の何 葉の何にさうけたり  
娘の何の何つさうての何

一子  
大鼻  
岳輪  
夢さ  
桂中  
雄剣  
蒼白  
雪権  
亞度  
魯原  
長老

〇九

鳥鵲橋

思ふしや昔にへたつての何  
心室や松のあけぬの何の何  
足るこそして森の何の何  
松風の香ハ通流りその何  
あまの何ありさうさうの何  
さうさう大橋も何の何流し  
かさう大流れて星のハ日か  
こさうさう大橋とさうさうし  
念さうく乳の糸も何さうり  
すじさう乳の糸の何さうり  
さう風や何糸の何れ乳の何

甲斐 漢甫  
筑後 双鳥  
左文  
其来  
下志 鱗々  
筑後 林是流  
赤井 賦碑  
伊豫 芸嶺  
其お  
乙二  
其松

願系

願系























きつる旅と月新なる海をわ  
 ある人のまをれていしきりか  
 つまやとん八碑子松のうけ  
 児てよけり人のふも碑か  
 きつる舟の乞食の海を渡せわ  
 仮初大とよりうけしる旅の月  
 終りあるのみをたぬきりか  
 ありぬのつれうくえゆるきりか  
 町はさるはへとん六とよりか  
 人天変の案名よりのそと碑か  
 きつる旅のふ八見のきりか

白枝  
 今  
 感  
 美  
 仙  
 大  
 八  
 梅  
 結  
 雲  
 梅

きつる妻とこりちうく旅をり  
 板をぬきに海ありげん碑  
 芳既八案はれ来りり大碑  
 きつる子のきのまよりいそとく  
 村白やきつるをなれて海の白  
 収凡の町白とんたるとよりか  
 満日やきつる同ぬゆる井のり  
 葉の湯者とえり人のある碑か  
 をとよりいそとく松凡虫のきり  
 鬼とより鼎とぬはりりりり  
 松板とより松子とよりそとよりか

来  
 年  
 長  
 月  
 魯  
 雲  
 三  
 万  
 小  
 久

題叢秋











秋火 秋火の消ゆるや芳の海  
 地勢多 化務して地勢多下木の辻  
 衝突入 つと入や志ん人に空ふ松子ゆけ  
 養又入 頭入て空一に鐘とされり  
 一 暁のまぶす中より一をわ  
 鐘のまぶしく桐の一をわ  
 月さるぬれ嵐の相の一をわ  
 相一を柳をにり落るり  
 秋もや桐のまぶしく人の心  
 見をそやふ一をしくの家の秋

不知何者  
 寒玉  
 甚木  
 几董  
 衰丁  
 尊左  
 自権  
 今  
 感吉  
 保吉  
 斗入

奔の戸へ指れ入り 桐一を  
 又多を押さるし 一をわ  
 落ては風さるしく 桐一を  
 これ見をいひぬさるれ 一をわ  
 留目の戸に木の虫をえたり 一を  
 取ちるんは良の 一をわ  
 常の地にやり 初やぶり 一を  
 相の木やちるとり言をさるん  
 分かれありさるにらる 一をわ  
 うちそよま松ちりくる 奔の鐘  
 桐ちるやすしうのりのちたり

因由  
 無因  
 佐丸  
 一蕙  
 杖長  
 長高  
 一瓢  
 年ん  
 弓管  
 士的

題義秋

柳 敬







葦

十しと平枝の夢のこぼれ  
花枝枝名ののこぼれ  
わたりくしとてとて枝枝わ  
ふとくた枝枝のやうな枝枝  
花枝枝ありたけ枝に枝に  
枝枝くさくさふふ枝に枝に  
白枝枝枝枝に枝に枝に枝に  
枝枝や枝に枝に枝に枝に  
葦や人も枝に枝に枝に  
枝枝に枝に枝に枝に枝に  
枝枝や枝に枝に枝に枝に

白梅  
異物  
尚也  
白枝  
女子代  
鳥疎

〇廿

枝枝や枝に枝に枝に枝に  
枝枝の花に枝に枝に枝に  
枝枝に枝に枝に枝に枝に  
葦や枝に枝に枝に枝に  
枝枝や枝に枝に枝に枝に  
色意風して枝に枝に枝に  
葦や枝に枝に枝に枝に  
枝枝や枝に枝に枝に枝に  
枝枝の花に枝に枝に枝に  
枝枝や枝に枝に枝に枝に  
葦や枝に枝に枝に枝に  
枝枝の花に枝に枝に枝に

葦  
白梅  
異物  
尚也  
白枝  
女子代  
鳥疎

題葦秋







舞の薨より出る物りか  
 物良やさる風よ薨をいつこまで  
 舞や下欄もりらぬ草の指  
 舞やさる花結て花の咲  
 物良く物良をさる咲にさり  
 物良にもうしませと物良り  
 物良の咲しを酒の芳尼はと  
 物良やうりるさる薨の上  
 薨の長米に咲る物良り  
 物良のうげんをさる物良か  
 權や薨一倍の人の物良

月五  
 今  
 去葉  
 今  
 岳轄  
 今  
 一親  
 長高  
 寛松  
 權也  
 一葉

物良の薨より出る物りか  
 舞やさる風よ薨をいつこまで  
 舞や下欄もりらぬ草の指  
 舞やさる花結て花の咲  
 物良く物良をさる咲にさり  
 物良にもうしませと物良り  
 物良の咲しを酒の芳尼はと  
 物良やうりるさる薨の上  
 薨の長米に咲る物良り  
 物良のうげんをさる物良か  
 權や薨一倍の人の物良

薨り  
 鞠凡  
 蕉角  
 少女  
 穴亦  
 芦渥  
 常笠  
 三津人  
 護物  
 瑞了  
 衰丁



物良とまふと物くはなしき  
 物良とまふとまふは舞の如  
 物良の花にも物と辨別か  
 舞やふたり移るりまて  
 様もまふとまふとまふりぬ  
 物良のぬれくまふとまふりぬ  
 疎林とまふと舞のりりりか  
 物良にまふとまふのまの物  
 舞の物まふとまふとまふりぬ  
 物良にまふとまふりぬ  
 物良はれらるるぬもまふと  
 万和  
 菜也  
 卓也  
 卷深  
 志字  
 解字  
 梅間  
 不圓  
 雙馬  
 雙湖

物良やまふはれぬのまの凡  
 物良の市に流れてまふりぬ  
 橋の元まふりぬもまふりぬ  
 舞やまふりぬまふりぬの物  
 物良の花にまふりぬの物  
 物良にまふりぬもまふりぬ  
 舞やまふりぬまふりぬの物  
 山頂や物良はれぬのまの凡  
 物良やまふりぬもまふりぬ  
 物良や隣りの木とまふりぬ  
 物良はれぬのまの凡  
 凡尔海  
 蘭家  
 北尼  
 木鶴  
 菜老  
 左氏  
 吾端丸  
 かとり  
 檜慶  
 江我  
 惟平

題素秋



木 様

朝良に三層子や松ののり 糸 直良  
 片時の朝良に後了り 一  
 舞や楳大秋の丸くろ 日 井  
 花は折れておろり花むす 樗良  
 花むす片たりのなやむりぬ 白雄  
 めく子の端飛出しきむす片 公  
 まゆのあまのつるや花むす 曉  
 ありしりのさし入る白むす 立  
 朝良にうすきゆりのむす片 花  
 る醫者のまゆ花むす 重厚  
 り花の中よりさしむす片 又

花むすのやにわうて花むす 祐昌  
 花むすやまうむす片花 士  
 花むすりりりりりりりり 井  
 半うすき見むすもあやむす 雲  
 花むすつ見らるや白むす 洞  
 花むすく見てさるりむす片 末  
 侍に代てやうむす片 公  
 さしむす片花のめたさるり 一  
 七うすき花むすやむす片 道  
 花むす花とらむす片 長  
 うりくとおろり直しむす片 一







子花の葉ハ重きもつゝとて  
 多火戸の花に中けりる位花か  
 咲ハさく厚き葉のちるも多火花  
 手くけりらぬ花あり秋の子  
 木の葉のやちれされも花のそく  
 あらましを咲もあらず多火花  
 けりくと見て持けりるそのふ  
 兎角して一把に折ぬめりふ  
 くるまのたよ折ハ折しめりふ  
 松風をさるまそ折王めり花  
 ぬり中れ中河流りめり花

下臨

由之  
 九井  
 富貴  
 老鴉  
 研丈  
 兎野  
 葉的  
 葉市  
 覽香  
 白旗

女ゆり花

人志れす花ハ色ぬめり花  
 原中れなりるそくめり花  
 ぬり花ふの口十も色れり  
 ぬり花虫の葉ぬめりりり  
 ぬり花けり花ハ折しそそ  
 ぬ折り花風たちぬめり花  
 ぬり花けり花ハ折しそそ  
 ぬ折り花風たちぬめり花  
 ぬり花けり花ハ折しそそ  
 ぬ折り花風たちぬめり花  
 ぬり花けり花ハ折しそそ  
 ぬ折り花風たちぬめり花

感志  
 秋瓜  
 踏石  
 斗入  
 全  
 大江丸  
 存世  
 写志  
 士初  
 全  
 道臨



めも花月のうららふ老ぬえし  
 めも花ふのあふりの名うらら  
 さりしやや名をのぬるめも花  
 さるる花のあふりややめも花  
 月をけにありやらしやめも花  
 又を摺のさるるややめも花  
 これをさるる花や眼えめも花  
 つ先や名を木のたけのめも花  
 と止まや名をのぬるめも花  
 折らうららうらて又あふめも花  
 親里へゆくり短しめも花

子歌里  
 一字  
 道老  
 今  
 魯隠  
 大身  
 月居  
 奇閑  
 寔松  
 聖境  
 権閑

の廿七

り人の縁にさるるてめも花  
 折らうららうらや名をのぬるめも花  
 何るるの子やらしやめも花  
 めも花にさるる閑に名を  
 人の上にならうららめも花  
 めも花のいんやらし花のさる  
 めも花のさるる花のさるるやめも花  
 人か月の月ゆれはうららめも花  
 足らうららうらや名をのぬるめも花  
 めも花のさるる花に折らあし  
 花に折らうらら花に折らあし

養也  
 常笠  
 一葉  
 護物  
 卓池  
 葉也  
 文角  
 梅間  
 雷跡  
 鷺電  
 梅閑

因満

題叢秋







鳴出しおに蘇尼の陽りたり  
下掃く庭ましきり蘇尼の志  
蘇尼の目おにりおはちりたり  
おにりおはちりたり蘇尼の目  
吹ぬるおはちり月あり蘇尼の志  
蘇尼の志おにりおはちりたり  
白蘇尼や佐りりおにりおはちり  
村おにりおはちり蘇尼の花  
現まておにりおはちりおはちり  
おにりおはちりおはちり蘇尼の志  
おにりおはちりおはちり蘇尼の志

会 秋瓜  
存 亞  
斗 入  
強 匠  
乙 固  
恒 丸  
士 的  
会 会  
柳 在

味いおの志おはちりおはちり  
蘇尼く下圍炉裏のいおはちり  
白蘇尼や佐りりおにりおはちり  
後のおにりおはちりおはちり  
蘇尼まておにりおはちりおはちり  
蘇尼の志おにりおはちりおはちり  
蘇尼の志おにりおはちりおはちり  
おにりおはちりおはちりおはちり  
おにりおはちりおはちりおはちり  
おにりおはちりおはちりおはちり  
蘇尼の志おにりおはちりおはちり

植 又  
榮 兆  
友 固  
子 的  
会  
完 素  
樟 堂  
乙 二  
一 子  
道 彦  
会



川人の子さす菘の垣端か  
 心の祝の度々も足ゆる菘の毛  
 むつくと折し菘の月足か  
 隣のをり菘の足頃と兼んたり  
 菘折や赤のおもしくは赤もそ  
 菘とより赤もそは赤の小菘か  
 菘折や赤にすは赤を赤  
 ひりしり、まのそ菘の菘の花  
 菘と赤の菘は菘も咲ぬへし  
 菘の心もそをけと咲にたり  
 菘とよりそは赤の菘とより

菘 朧  
 岳 輪  
 菘 中  
 菘 子  
 菘 隠  
 平 角  
 菘 汝  
 一 桑  
 菘 笠

○卅

菘ののりや菘もそ赤の菘  
 折てゆく菘もへしや赤もそ  
 うは菘の物益はそは菘もそ  
 菘の心もそは菘もそ  
 起とる菘に小菘をのそ赤もそ  
 菘の白赤は菘もそ赤もそ  
 菘や赤や赤もそは赤もそ  
 菘のつりかゝる菘の菘もそ  
 菘の心もそは菘もそ  
 菘の心もそは菘もそ

菘 朧  
 岳 輪  
 菘 中  
 菘 子  
 平 角  
 菘 汝  
 一 桑  
 菘 笠

照叢秋



秋ふくや出でてささ心梳のれ  
 日う前と中嵐名のれ秋夜更  
 藤う下ちんまを星の光生守  
 秋清そ出返るるま奔りりり  
 白秋は是のころうれりれ  
 片叶もをれぬやうや秋咳  
 白の秋すすれ中へ乱せりり  
 こらうれも戸をさつ片めをれ秋の心  
 けいづくくと秋折る人やけん  
 あり庭や橋のりあふ秋のさる  
 片照へ人にふさく河を秋

女 赤  
 松 又老  
 下 由初  
 下 真  
 陸 心人  
 陸 海樂  
 陸 英二  
 佐 左民  
 佐 田山

秋

恨は人にをされつ藤のふ  
 ころくくと木のれもさるれ秋のふ  
 以ふる藤の小藤もさるれり  
 細道の秋と起して西りりり  
 志つるを藤にけりりりり  
 藤の戸によりりりりりりり  
 秋のすしさと又初るるるるる  
 秋秋の風うらるれて人と吹  
 境のり如にるりぬ 秋の青  
 魚つりた刀ささりりりりり  
 秋のまやまといらりりりり

茅丸  
 精麿  
 敬平  
 古光  
 伊勢 舟渡  
 植丸  
 ち丸  
 橘丸  
 藤丸  
 藤丸  
 藤丸

題叢秋



曉や海へ流れて蕨の香  
 ん片とすむまのうし蕨の香  
 これとも老ゆくまのうし蕨の香  
 江の帆や香りしきの蕨の香  
 壱の毛はつやのよれと蕨の香  
 延きうま折 控すんで蕨の香  
 蕨の香る風方角もろりりり  
 森てぶく下うま蕨の香の香  
 おのれのとてあつあつ蕨の香  
 とくくやほつとくく蕨の香  
 蕨の香る麻おれむけはをらし

斗入  
 恒丸  
 士鶴  
 今  
 轉磨  
 養乳  
 月飛  
 長高  
 北溪  
 養子  
 何頼

蘭

草の香も散る蕨の香  
 一調子付くやとやの蕨の香  
 川橋のそと泊や蕨の香  
 蕨の香る人のまやとまよふと  
 けんふりとわれてあつあつ蕨の香  
 めつとくまよふとむく蕨の香  
 鳴やむか蕨れとく蕨の香  
 蕨の香るまの心をさるれたり  
 葉の香とまよふと蕨の香  
 西の香もあつとれてや花白く  
 らたのうへ狐のれと蕨の香

桐柄  
 車池  
 鳥  
 湖中  
 柳女  
 柳廣  
 梨雪  
 古岸  
 平砂  
 香  
 瓜

題叢秋











冷人の玉葱おたるふとく  
みりまそひりるりたる  
うつくとまのふとく  
あけうくとまのふとく  
戸庭開て久しきふとく  
松凡中慈子忘きし  
秋桂てふれ守にいた  
これひら秋片てし  
孤うくやのふとく  
控下中揚おしふとく  
瘦るのふとく

吉野  
几董  
芭蕉  
士郎  
恒丸  
敏彦  
冥  
寛松  
小舟人  
陶生

糸

瓜

とろりて薄くも  
は入て秋芳の垣根  
瓜園のふにけの  
夏斗むすも  
白いとく  
秋壺に  
傾城の樂  
跡木とた  
つらに  
おひれ  
これさ

秋廣  
鬼洞  
棠飛  
棠瑞  
瓜坊  
是彦  
葉左  
葉右  
大和丸  
華伯  
棠英

蕃

椒

題叢秋



秋	改	木瓜	蓬	木瓜	蓬	鬼	老	一	等
秋	改	瓜	蓬	瓜	蓬	鬼	老	一	等
秋	改	瓜	蓬	瓜	蓬	鬼	老	一	等
秋	改	瓜	蓬	瓜	蓬	鬼	老	一	等
秋	改	瓜	蓬	瓜	蓬	鬼	老	一	等
秋	改	瓜	蓬	瓜	蓬	鬼	老	一	等
秋	改	瓜	蓬	瓜	蓬	鬼	老	一	等
秋	改	瓜	蓬	瓜	蓬	鬼	老	一	等
秋	改	瓜	蓬	瓜	蓬	鬼	老	一	等
秋	改	瓜	蓬	瓜	蓬	鬼	老	一	等

秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋



秋にさうして露のあつらふしと見えたり  
 秋の露のあつらふしと見えたり  
 秋の露のあつらふしと見えたり  
 秋の露のあつらふしと見えたり  
 秋の露のあつらふしと見えたり  
 秋の露のあつらふしと見えたり  
 秋の露のあつらふしと見えたり  
 秋の露のあつらふしと見えたり  
 秋の露のあつらふしと見えたり  
 秋の露のあつらふしと見えたり

古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年

秋 螢  
 秋 蟬

秋の螢の光のあつらふしと見えたり  
 秋の螢の光のあつらふしと見えたり  
 秋の螢の光のあつらふしと見えたり  
 秋の螢の光のあつらふしと見えたり  
 秋の螢の光のあつらふしと見えたり  
 秋の螢の光のあつらふしと見えたり  
 秋の螢の光のあつらふしと見えたり  
 秋の螢の光のあつらふしと見えたり  
 秋の螢の光のあつらふしと見えたり  
 秋の螢の光のあつらふしと見えたり

古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年  
 古 久 末 定 玉 園 樗 存 杏 桂 年

題 詠 秋



明

蟬の聲のなへおれをたたり  
まけかて親うしきうし娘の蟬  
声にて葉のまきもさるや娘の蟬  
声の居るかゝるぬきし秋の蟬  
桐やつふんきさる薄もあり  
桐やあふふふ枝に鳴うつり  
桐のまけかたうつくたつり  
りとりや蟬をれさる娘のま  
ま四すりとりのおき耳んたう  
いとりのおきさりりうつり  
いとりのおきおき破家か

眞く  
瓜坊  
三  
南光  
柳瓦  
曉音  
今  
菟左  
白旗  
又陽  
恒丸

〇  
冊八

蟬

蟬

いとりよさうさうりたるクメか  
いとりや松葉の洗むあの上  
いとりのおき多う家んたう  
いとりやつれれ花はむの松  
いとりや海さきいぬるよ木葉  
秋の聲そのまきしけ鳴んたり  
蟬の聲や花を親れしきおん  
か八斜 園風の流れ蟬の  
蟬の聲やまきも其まきもさる  
うろくまきり向折へて蟬の  
蟬の聲や休るまきもあてあ

長  
葉  
日  
電  
毫  
身  
柳  
葉  
多  
葉  
百

題義秋



秋の華は未だ咲けり  
花の原の夢草花  
花のや左の目もれ  
花のや花れもれ  
花の千はり  
花のよれ  
花のよれ  
花のよれ  
花のよれ  
花のよれ

白梅  
乙二  
乙二  
乙二  
乙二  
乙二  
乙二  
乙二  
乙二  
乙二

〇冊九

花のよれもれもれ  
花のよれもれもれ  
花のよれもれもれ  
花のよれもれもれ  
花のよれもれもれ  
花のよれもれもれ  
花のよれもれもれ  
花のよれもれもれ  
花のよれもれもれ  
花のよれもれもれ

道元  
一葉  
岳嶽  
一葉  
右様  
一葉  
一葉  
一葉  
一葉  
一葉

題叢秋



虫 送

虫のよきあつとんは  
 はしめくうねのちあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは

大 江 丸  
 多 羅 里  
 朱 員  
 一 子  
 道 亮  
 今  
 岳 轄  
 平 角  
 菱 子  
 寛 松  
 三 守 人

題 叢 秋

秋夜は静と志をこころけちの  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは  
 虫のよきあつとんは

大 江 丸  
 多 羅 里  
 朱 員  
 一 子  
 道 亮  
 今  
 岳 轄  
 平 角  
 菱 子  
 寛 松  
 三 守 人



森心の上は古く休寂か  
 古鳴やうきうき此小葉  
 古の芳は固きしるそ小葉  
 古ううや古葉のたうそ  
 古こと固てふれはうれり  
 鳴古にききまのけくやあ  
 古の芳のゆれにむきく小  
 けりしと捨ても古の鳴きか  
 後のへる葉と固り古の芳  
 森舞ハ家の根るれや古  
 古の芳に一云もるき性りれ

在 権  
 草 池  
 不 老  
 葉 也  
 李 長  
 石 海  
 燕 子  
 推 已  
 米 年  
 乙 卯  
 論 陶

古ううやうきうき此小葉  
 古鳴やうきうき此小葉  
 古の芳は固きしるそ小葉  
 古ううや古葉のたうそ  
 古こと固てふれはうれり  
 鳴古にききまのけくやあ  
 古の芳のゆれにむきく小  
 けりしと捨ても古の鳴きか  
 後のへる葉と固り古の芳  
 森舞ハ家の根るれや古  
 古の芳に一云もるき性りれ

一 三 徑  
 何 考 究 的  
 由 之  
 玉 彩  
 流 不 玉 豊  
 保 吉  
 一 学  
 道 彦  
 杖 枝  
 曉 彦  
 一 学

鈴  
 虫  
 松

題叢秋



















瓦きいさるやり蛇に來る春  
 ともしらる春もけり子の有  
 且れくは鳴き流さるるなり  
 鳴もけりたてに采る花菫の虫  
 物毎のありて打りし一たの虫  
 道の辺や小萩にふる鶯の虫  
 庭より古茶の垣のくはれも  
 垣割り鳴 垣刈るくや松のむかしと阿やうに  
 鳩 吹 する人の鳩吹をさる葉地か  
 初 鳴 初鳴や魚丸をさるるひれ  
 堀出鳴 山菜もむし人堀出といふも鳴

一葉  
 左菊  
 丈方  
 護物  
 秋丈  
 標也  
 一葉  
 輔之  
 去鶴  
 中子  
 護物

鷹の山か 陣出十ヶをにころるも鷹の辺  
 小 鷹 萩折つ尾ふさるる小鷹物  
 荒 鷹 荒鷹や身ふるは志行と院りか  
 鷹 歩 鷹歩のふ長さを説き騎  
 殊 是 横さるる外の子いつる鶴若し  
 然しとて是さるる秋も十日たつ  
 秋の思さるる橘のまにさあし  
 ね負の花にさるる殊若し  
 たのりやさるるさ思ふさその日  
 せんさつて殊る若や鶯の上  
 片類に秋の思さるる 雛 子心

鷹 盧外  
 道亮  
 護物  
 不月  
 公  
 米良  
 寛松  
 号老  
 一葉  
 障友  
 護物

題叢秋



扇置

捨忠海

文の片大波うらうら、秋の上  
 赤松の在りしに凡ゆる疎星か  
 子の原扇置を一人のり  
 扇置文の元や沙着をうら  
 因言言れりたりたり控麻子  
 竹のそ、海杉へうぶあうりぬ  
 海杉と置や午のまのうらうりり  
 焼甚れきてあふまじ忠海か  
 非のあ疎星をこ越すの原のり  
 海杉人あまうりたるれ、枝のあ  
 約人やあうたたたて守子のあ

去 嘘  
 六 尺  
 米 尺  
 著 三  
 一 狐  
 松 白  
 朴 高  
 学 笠  
 園 上  
 白 破  
 全

白あや葉の刺にひらつ  
 白あやうら胃は約毛ゆるし  
 初あを忠海にうし端飛か  
 疎さあやあをうれ、子のあ  
 白あやまをこ居れてまのこ  
 うの子をいれ、人の骨のあ  
 物子のこれるもあや半の角  
 物あやせはさその女括れ  
 あうしや括授を折て居る人  
 白あや園に控れ、海人と守  
 白あやハ芭の上のあうらうら

葉 木  
 全  
 保 吉  
 全  
 蝶 夢  
 尺 尺  
 全  
 二 柳  
 水 鳩  
 自 樂  
 全







味しきとて存て是より是の参  
ら参れ糖のくる位在 水  
ふら風と手来りしるや秋の参  
ら参や松れそやうの参  
海苔生や参の上り乳法味  
糖とて参の流し心糖か  
参よりし参や洞人ひ参や  
参らるや糖の心の参れり  
心た参る参の参り参の参  
的参りて位参りぬ参の参  
足れしらぬ参り参り参り参

参三  
全  
糖参  
一参  
菓  
月参  
全  
乙二  
全  
全  
道参

時百の中りし参や秋の参  
夕よりや参もぬら参の参  
参の参を参れ参り糖参か  
ら参やよ参自参参の参  
自参とう参は清ぬ参の参  
ら参の参参参参 糖か  
しら参や参のつら参秋の参  
下参参参参参参参の参  
ら参も参くや参参参参の参  
夕参やいつ参参参参の参  
獵参の参参参参参参参

全  
全  
糖参  
一参  
菓  
月参  
全  
乙二  
全  
全  
道参



ねおれはるをさるふむつらか  
 おれはる果はるさるさるり  
 心道へ曲望はるおれ自らあり  
 見ておれはるさるさるしおれはる  
 字のさるおれはるなりおれはる  
 おれはるはるはるはるおれの割  
 おれはるに狗のさるはるさるり  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるのめはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはるはる

羨  
 考  
 全  
 雲  
 魯  
 復  
 彦  
 人  
 雁  
 幽  
 瑞  
 葉

うつりおれはるや字のさる  
 割元の葉はるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる  
 おれはるはるはるはるはるはる

松  
 一  
 萩  
 秋  
 喬  
 梅  
 眞  
 凡  
 左  
 左  
 掬  
 玉



家の春世を花んを定めり  
 家の子見ぬ人や氣の長く  
 家をすしおの解にたてまつり  
 子の戸ひひり立ちり家を重み  
 白家をぬすさての人も  
 誰り来て灯をひかり家を指  
 家のまじし赤子の二赤ものこそ  
 管毎れまの袂や家のあ  
 つめてひりや園ん家のあ  
 鶯のまきさしつれし枝のあ  
 火をもしつまる家のあしたか

伯先  
 柳中  
 鶯六  
 輜之  
 小丸  
 女  
 古  
 古  
 古  
 古  
 古  
 古

波をりくくり子のあ  
 人かまあ見て流るるささ  
 家の子身麗に人の海りり  
 並おや人目恐りしもあ  
 白おに流るるも来て祀にり  
 小おと追きりりるのあ  
 家のここの多さき枝のあ  
 暎やあくと木のるより  
 折おやや針指ふきのるより  
 かの井ハ松子まのえあのお  
 白家の境ぬれりや子のあ

兼  
 又  
 一  
 養  
 白  
 射  
 李  
 季  
 葉  
 柳  
 陶



川草やう地のあやあの上  
 一葉  
 ありやうらなれまも非の葉  
 車両  
 ちるあや花よりたるま  
 草  
 まとあやたはれんあふ葉  
 草  
 松のまはほそとあやよりわ  
 草  
 ありの万と牛の鳴よの返りより  
 草  
 白あはゆりしまのや牛の角  
 草  
 又そのうされてあくとまにより  
 草  
 かくあいのれよりあは車か  
 草  
 白あはりれより流のま  
 草  
 砂波のまもあはれは  
 草

霧

題叢秋

霧うりりくまのまのまのま  
 月  
 空まも起るまのやまのま  
 文  
 霧はくまのまのまのま  
 可  
 清くも心にくれてあ  
 白  
 あま手まはれはやあ  
 松  
 朝りりのあまのまのま  
 松  
 まはあまのまのまのま  
 松  
 白あやふらふのまのま  
 松  
 白あはれまのまのま  
 松  
 霧はまいて見てまのま  
 松  
 霧うりりくまのまのま  
 松











病つちや種名のそりのあまふ  
 いれつちやたおりの入へてさし  
 病つちや周の花の種に  
 いれつちや子にさしはるの  
 病つちや足る方と備し  
 いれつちや揮ふさるの折つて  
 病つちや聖人の来り  
 いれつちや揮ふさるの折つて  
 病つちや心の隠れぬけ  
 いれつちや障子さすもひ  
 病つちや此の時あれが

連騎  
 了如星  
 全  
 一子  
 道彦  
 全  
 乙二  
 常益  
 長高  
 頑弁  
 万不

病つちや夏に免のつて  
 いれつちややめはれに  
 病つちやその次さす  
 いれつちや世して  
 病つちやらんらん  
 いれつちやそれ  
 病つちやらんらん  
 いれつちやらんらん  
 病つちやらんらん  
 いれつちやらんらん  
 病つちやらんらん  
 いれつちやらんらん  
 病つちやらんらん

光中  
 元十  
 亞侯  
 伯先  
 少少  
 麗凡  
 少少  
 我電  
 蒼嶽  
 了國  
 仙頭

題兼秋



初風

風つそん途るそんニハカ  
 持つそん母のそん如の子  
 り風つそんこれハ心人の初風  
 い風つそん凡つりらるる風  
 初風吹て砂利のそん初風  
 古地やめ風そん初風  
 初風被そん人のそん初風  
 是そんそん初風そん初風  
 初風ハ初風吹て初風  
 初風やそん初風そん初風  
 初風や人ハ初風初風のそ

丹波

李尺  
 文成  
 不蘇  
 尋凡  
 百雄  
 保光  
 吉成  
 光松  
 池揚  
 周文  
 兼左

秋凡

秋凡千于魚ハ行たる溪底  
 秋凡や若もたのそん溪底  
 秋凡や初風ハ初風そん初風  
 初凡も并もそん初風の凡  
 秋凡や初風ハ初風の凡  
 是そん初風の初風そん初風  
 蕭の初風のそん初風の凡  
 心道や初風のそん初風の凡  
 秋凡の初風立むそん初風  
 是そん初風の初風の凡  
 是の初風そん初風の凡

題叢秋

兼右  
 白雄  
 成吉  
 樗凡  
 凡董  
 吉成  
 又成  
 成吉  
 全  
 雲江  
 跨石



娘凡やとてうそも強る氣  
 秋凡をとりまゐておれぬにやう  
 月のあるやと押出さ秋の凡  
 梢れ木や雀あつまる娘の凡  
 秋凡にこそもあつる白髪か  
 時よあふふよりや娘の凡  
 娘凡やあより秋へり 鳥  
 秋凡の吹すうしかり叢の凡  
 娘凡のと秋弟し下 鳥か  
 秋凡とあつて吹止む秋凡か  
 風秋のそよぶとあつて秋凡か

存 亜  
 美 二  
 斗 入  
 今  
 恒 丸  
 吉 川  
 土 郎  
 公  
 希 云  
 張 六  
 長 翠

あつてんあも吹心秋の凡  
 秋凡や鏡の首 氣と見ら  
 あつてんあも吹心秋の凡  
 是ハキの屋息吹心秋の凡  
 ころ老さうらう来てて秋の凡  
 妙豆のこもよきう秋の凡  
 梅れよふ老心はハ娘の凡  
 生網のあつてん秋の凡  
 ころのあつてんあも吹心秋の凡  
 怪蛇のこもよきう秋の凡  
 大元れあつてんあも吹心秋の凡

星 希  
 米 兵  
 有 心  
 完 来  
 序 枝  
 場 澤  
 芳 茂



あつりや母の糸より娘の糸  
 暮れて狗うらうらと秋の糸  
 娘几个弦をひきあすの代ま  
 子れといふ声はあつり娘の糸  
 比次や子も人目も秋の糸  
 秋几の子も平木様を落しり  
 子那てひる大と秋の糸  
 けりあれはら毎に吹ぬ娘の糸  
 親りのぬれ大風を娘の糸  
 秋几や藤よとの遠はいつんはく  
 くれ沈むまのれあれ娘の糸

可那室  
 八  
 鬼子  
 大鼻  
 一子  
 月夜  
 八  
 善高  
 乙二  
 八  
 尺丈

まの糸とあれはらと秋の糸  
 秋几や暮るを風と秋の糸  
 ありとのあつりて秋の糸  
 娘几の子けを枝を小松や  
 秋几やと暮るやうん糸  
 糸やんばしめを別ぬ娘の糸  
 子の戸や母の糸の秋の糸  
 秋几や世の糸と娘を腰をひ  
 くれ吹まの糸と秋の糸  
 ありまの糸と娘の糸  
 娘几やり娘にうす糸をうじ

玉屑  
 八  
 義也  
 一葉  
 葉子  
 定時  
 平角  
 武浪  
 常盤  
 括也



小菫の口の唇さぐん娘の丸  
 まのふくふきのついでれと秋の丸  
 芹とよふん大ぶし娘の風  
 秋の丸人への息見てさ  
 娘の丸つらしきうりる口を  
 秋の丸の静しきなる日あか  
 河尾ややり起されて秋の丸  
 秋の丸と花かゝらん丸れきり  
 娘の丸道長おしき并か  
 秋の丸や角力りし守大男  
 娘の丸や実ハのふも秋の丸  
 岸  
 少女  
 三人  
 全  
 亜淡  
 復あ  
 卓池  
 漫く  
 女淡藤  
 游多  
 子用  
 淇岸

夕暮や心候うるそと娘の丸  
 ついて来てみ越んや秋の丸  
 心候の丸も丸たり娘の丸  
 際を丸ちんさふ暇も秋の丸  
 傘を丸るに舟たり娘の丸  
 しみくと秋の初丸地にうけり  
 子とさる丸つ若れどきり秋の丸  
 妻と丸の丸見れん丸娘の丸  
 娘の丸多い丸下り嵐の齒  
 秋の丸や小子の舟の丸の泡  
 ゆくさる丸立せりり丸娘の丸  
 加賀  
 岸  
 六合  
 鴨鳴  
 流崎  
 魚心  
 乙道  
 深雅  
 新有  
 牛乳  
 松江  
 暮権



新田様

お 撲

中ハ多クあるはれす様のは  
 ところろ来て人にありはれ  
 秋はの神はく午午時のは  
 その色ハ秋海棠や新田様  
 葉を見ては新田様  
 投られて先月と見るとまは  
 とも思ふはれにゆきお撲  
 日中よりしてはれある角力  
 うるまのこれ老にり角力  
 大肉衰の妙は午午角力  
 傍角力は佳るとおはれ

鳥路野  
 鳥路考  
 左節  
 梨明  
 乙二  
 鳥路  
 鳥路  
 鳥路  
 鳥路  
 鳥路

出るとはれにありはれす角力  
 成りにハよきはれす角力  
 先電うそのはれす角力  
 狗あるはれす角力  
 やまはれ人分りハ傍角力  
 様に見るはれす角力  
 母親に見送るはれす角力  
 いくれ世とあり角力の  
 夏すはれす角力の  
 書力ハはれす角力の  
 ありはれす角力の

鳥路  
 鳥路  
 鳥路  
 鳥路  
 鳥路  
 鳥路  
 鳥路  
 鳥路  
 鳥路

題叢秋



霧の根の小流にゆる角力か  
夏角力をたて強ふと見する  
ころ角力夏にいつては夏角力  
海心と名のよなる角力か  
芒より霧より出たり夏角力  
角力より水端にころす洞か  
先生といへばさるすべし  
ころふ名へおれを夏角力  
おれとわらふ名へさるすべし  
人中やまのいれなき角力  
葉おれをたて強ふ角力

士 仍  
丈 左  
可 親 里  
磨 新  
月 疏  
一 孤  
幽 嘯  
焉 頂  
葉 也  
非 了

花 火

おてこれかまの思ひし角力か  
ころ角力たて強ふ角力の中  
勝りた凡の善あるすまふか  
名をたてし根のたて強ふ角力  
花子を見むしおれや角力か  
花火たつり来下白ふ玉に  
夏秋のころおれは花火か  
川面や花火の徳の搦の善  
曇る月も曇るころも花火か  
花火たるはとをば是れか  
老の胡亂花火に遊れたり

構 葉  
未 光  
瑞 了  
我 凡  
尚 山  
百 明  
白 境  
全  
薨 右  
保 吉  
寛 松



不知火

花火居ハ丘の英人を見たり  
むらぐれを星を透して花火か  
字の家嵐花やたこを丸なり  
夕鳥火家をついた花火か  
幻もよみ下子ある花火か  
しるぬ火か花にうつる年日か

三層人  
瑞可  
九万里  
孩孺  
李天  
鬼將

佛神昔句類書秋中

松丘左舟一輝

八月

八月廿二葉ハ黄色に赤くふか  
八月廿三日にちふ葉の心  
八月廿四日にもよる子の葉柄  
八月廿九日てあしてはふふれ  
八月廿日南に訓一花すまき  
八月廿七日よりとれす葉の定  
殊更ふ人凡百を葉月か  
羊の葉の立てすれ合ふ葉月か

洪仙  
士郎  
外六  
船中  
柑葉  
漫々  
瑞可  
政二  
長翠

願葉秋



竹 去  
八 朔

陰も出て井の裏に八をたたり  
い新やさそ 望よりハ二日月  
い新や 扇さし たる小百地  
い新のそそ 霧雀 井にさへ  
い新や 帷子さへ 酒さへん  
い新や 松にさへく 新 新  
い新の旭小星さへ けわ  
井さへや 井ハい新の星 彗  
い新の火葬も 名をさへ 久 桐  
娘や 花や 月さへい新の月の子  
い新や 氣に入たる 田の嵐

伊藤

湖 芳  
葵 木  
薔 左  
白 権  
檮 負  
政 二  
存 亜  
土 仍  
道 差  
常 差  
寛 松

田 五

八 朔 梅  
繪 川 器  
寧 存 象  
吳 服 象  
初 月

名はれ 新のよき 出れたり  
田五のりさへ 三 匠の氣 智わ  
鷹のりも 出 田五の田つらわ  
さへや さへく 新梅の星 月夜  
絵川 器や 素おと 浮と 杉と 琴  
寧存象 八月大 扇に 探つて 梅の 花  
吳服象 いと 芒さへ ぶさへ 下れ 象さへ 水  
初月 斗さへ ころく ちれ 心 越 了  
心星や ゆさへ 月星の 初月 夜  
素文に 来ぬ 人 来さへ 初月 夜  
初月や 扇帷子 美人の ころ 氣

又 老  
悦 去  
白 権  
流 々  
不 知 若  
奇 剛  
全  
斗 入  
士 仍  
檮 差  
道 差







白雲の白てそあれさ月  
 笠にいつて美身もそさ月の  
 二日月の元七忘ぬ身衆か  
 けりも七不是さる之りの月  
 二日月や連歌して月あの上  
 二日月の井の先たさるる  
 月とくと文月とさる芦田か  
 芦の煙に及びそさ月あか  
 心軍や婚連ありとさる月あ  
 待 宵 待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人

伊予 陸奥 尾張  
 観之 好 搦白 和乎 斗入 存亞 持也 柳所 菟古

待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人  
 待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人  
 待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人  
 待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人  
 待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人  
 待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人  
 待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人  
 待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人  
 待 宵 竹葉集の調の思  
 ちるさる月はくればさる人

白梅 存亞 一醒 年心 一子 一序 道亮 全 葵守 三府人 其父







明くは海流の傍りに小龍か  
 明くは中ちるれにるれと声の勢  
 明くはとよみ目出るなりか  
 明くはあれうられり瓦くれ  
 明くはすくに枯たる龍の原  
 明くはハ行ひるる見ても心  
 明くは此原をさるあのをむ  
 明くは中流流よりれあつる  
 明くは中ちの勢にハ心の力  
 明くはを大るれあつる龍のん  
 明くはも海の前はゆりりり

存 亞  
 謀 乃  
 士 約  
 合  
 長 翠  
 桂 又  
 井 公  
 梁 兆  
 標 中  
 宋 英  
 合

明くはあふや小庭の一ツ  
 明くは衆の裏に一山の上  
 明くは忘るる花を  
 明くは折ふ片をあるそれあ  
 明くは雪をれれまより一ツ  
 明くは雪をのほのまき  
 明くは月をれれまよりその  
 明くはふりて春の中  
 明くはれれれれれれれれれ  
 明くはれれれれれれれれれ  
 明くはれれれれれれれれれ

合  
 吉 成  
 河 雁  
 白 虎  
 完 来  
 年 心  
 善 来  
 善 二  
 子 如 星  
 合  
 合



名りや控子の親も出て来ん  
名りやふらねりうかり一ふ  
名りや西に左に水の一人  
名りやさしき音の白んか  
名りや小めら置き一詞の花  
名りや秋聖も又都の月なま  
名りや瓜をさす千の雲  
名りや人の深山花耕子  
名りや家にもれハ親二人  
名りや来もまそのひりこ  
名りやをを舞よとふり 時

一子  
全  
冥  
乙二  
道差  
日取  
岳嶺  
全  
平角  
去繁  
奇園

名りやまにぶあるわりとせ  
名りや鏡 巨の障の寺  
名りや水巾の菖の花 建  
名りやうといそれぬ地のは  
名りや枝うりすも心路か  
名りや一是よれハ木弓か  
名りや大寄うとたそ葡萄柚  
名りやゆれハ老の藤すこ  
名りややみあ一あてしり  
名りや花をさすも娘のを  
名りやよりと名りや馬例か

葵  
衰丁  
菘  
寛松  
常生  
全  
身隠  
瓦全  
三人  
直麦  
一葉



立上れハ名りもめ松もろし  
 名りやろふもれハ山とあり  
 名りやろふ送り守井の中  
 声大帯そめろ祝ふまぬわ  
 名りの控まろいへ海の上  
 名りハ人にあみかたえろり  
 名りや響と恋すハあり  
 名りや一里はてし葬りのて  
 名りや延てろすか陶 坂  
 名りや葬りのろり心ろり

日人  
 志字  
 梅間  
 漢物  
 井有  
 一帯  
 井妓  
 一蕙  
 井席  
 井路  
 志院

名りや目と休むれハたろり  
 名りや死るはろのまろ子の上  
 名りやろろろろり子の家  
 名りはろろろろり流 石  
 名りはろろろろろり流 石  
 名りやろろろろり流 石  
 名りやろろろろり流 石  
 名りやろろろろり流 石  
 名りやろろろろり流 石  
 名りやろろろろり流 石  
 名りやろろろろり流 石

魯冠  
 北尼  
 雲平  
 松江  
 流石  
 一白  
 平高  
 妻翠  
 玉々  
 三壽  
 尚山

題叢秋



今日月流くそれ中よりくさの月  
 伸し流く亮きよとんもあれ月  
 花さハおちもれあつらふれ月  
 旅つとふさむさうりふの月  
 さあくのんのうへやうの月  
 六十の服もあつらふの月  
 鏡の白もあつらふの月  
 子の月しんもあつらふの月  
 美代や心のとらふれ月  
 是れもいふもあつらふの月  
 海に流るる志らふの月

樽  
 花  
 全  
 吉  
 二  
 大  
 存  
 士  
 恒  
 松

旅よいつあつらふの月  
 足らぬとやあつらふの月  
 ちつとさいふもあつらふの月  
 存たれもあつらふの月  
 是れ折て子の口もあつらふの月  
 ちあれ月入るもあつらふの月  
 むつとせむ甲斐もあつらふの月  
 ちあれ月不死の美もあつらふの月  
 海にやあつらふの月  
 百通も流るるあつらふの月  
 ちあれ月さあつらふの月

張  
 樽  
 全  
 美  
 文  
 喜  
 全  
 大  
 送

題叢秋



池も影り元々釣の星  
 峰やうと掃き帯多此日  
 松凡のうやいさきさ大日  
 さ此日ふの既ハヤしくそ  
 といぬちりあひなり足きりあ日  
 父母大徳自ら流してさ大日  
 公獲すやうにさきりさ大日  
 松凡を大ささきりさ大日  
 昔もして二万のあぬり大日  
 三十七老のうらさ大日  
 海山のわけて起んやさ大日

全  
 支葉  
 岳嶺  
 全  
 日化  
 蕙白  
 寛松  
 雲旗  
 常笠  
 号老  
 後物

たり古す日とそきん凡さ大日  
 さあくの名も流ささ大日  
 うち中た居も流あさ大日  
 ああ凡さあさ大日  
 朝自ら花ささ大日  
 いささよあ人もあさ大日  
 たいんさあさ大日  
 教のあさ大日  
 ひろさ大日  
 梳んはいてありさ大日  
 さのり大日

夢さ  
 枯半  
 三唐人  
 亞淡  
 以雲  
 漫  
 年他  
 相翠  
 子乳  
 且斐  
 鷗海























夕空をぬく霞も月夜の光か  
あやせ月の中なる夜も  
月のはるすゝか花もあつきの泡  
ふれぬすすれ入るる月を  
揺さりくくくく月の山  
秋七子咲道てより月あか  
るりてやそそくく月あか  
いつやうの霞も浮きこぼるあか  
子の戸や月れぬてあかあか  
月のやりのふとれとあかあかん  
あかあかあかあかのりるあかあかん

月夜  
一子  
花候  
一子  
三  
祥来  
左  
義理  
左  
末  
左

ハナにあそく荒やいとあか  
猿入る舞や月もあかあか  
松をそく男も月あかあか  
さす月のあかあかあか  
あかあかのへもあかあか  
あかあかあかあかあか  
うろれぬ片とあかあかあか  
あかの煙の流に月あかあか  
あかのあかあかあかあか  
あかのあかあかあかあか  
あかのあかあかあかあか  
あかのあかあかあかあか

左  
月夜  
一子  
乙二  
左  
一葉  
一葉  
一葉  
左  
左  
左







芦の目追ふるく原ととえうり  
 どの子のあやちつあふやの目  
 洗地のを穿く一たる目  
 久り集てあふのつをく目  
 森をその又おりる一  
 はたれのをに係る目  
 一は志してあまぬる目  
 流りけ八月の光れたる目  
 葉うけも草葉さく目  
 走山の光ぶる目  
 月よりやけく目

陸奥 呂 燦  
出羽 巴 陵  
陸奥 丹 古  
一 惟 平  
一 可 遊  
出羽 枝 麿  
出羽 玉 英  
河内 徐 業  
伊勢 志 完  
 石 鼎

秋の目

おろりたりけく月の舞  
 月の目送るくや山の舞  
 石山や草葉た出る秋の目  
 秋うくあふく月の照る目  
 ねた秋一たるの目  
 むろくと尾葉にさたる秋の目  
 秋の赤や目に押あはれ秋の目  
 見ゆてあふハ草葉に秋の目  
 葉盡の鬼すく目  
 秋の赤ハあふく目  
 山里やりうらぬる秋の目

佐原 左 鼻  
 右 弁  
 院 善  
 保 吉  
 岱 喜  
 斗 入  
 全  
 存 亜  
 大江 凡  
 上 郎  
 希 玄

題叢秋



乙 二  
 全  
 月 派  
 岳 籍  
 支 繁  
 長 高  
 赤 淵  
 権 剛  
 舟 原  
 寛 松  
 申 為  
 喜 年  
 権 忠  
 全  
 全  
 左 琴  
 完 乘  
 首 三  
 義 里  
 席 杖  
 真 々  
 兼 礼

乙 二  
 全  
 月 派  
 岳 籍  
 支 繁  
 長 高  
 赤 淵  
 権 剛  
 舟 原  
 寛 松  
 申 為  
 山 並に伝るれてそ秋の月  
 着のまの裏より秋の月おや  
 夕暮をよもむれ控れ、秋の月  
 いつたおももふおやに娘の月  
 氣をきく友あり昔の秋の月  
 名ふはばはめて娘の月  
 酌や泊をいそぐ秋の月  
 折りしやがらうらやの娘の月  
 山の娘ににまゝの春うらや  
 深きやなかりれそに秋の月  
 松丸はゆるおに娘の月

題義秋



控て折らねるふきの秋の目  
よん折らぬふきの秋の目  
あふさへあふさへ秋の目  
大なるやうな秋の目  
釣の糸控てもと秋の目  
早やうに折れぬ秋の目  
坂をよめぬ秋の目  
くもせにくもせぬ秋の目  
おのゝ世のほろぬ秋の目  
更りや柳の葉の秋の目  
秋の目

夢  
護  
唐人  
石海  
馬頂  
尊年  
久感  
尼  
河  
道  
芝  
邦  
北  
溪

よるふきの白れぬ秋の目  
たせろる春の目  
や折れぬ秋の目  
歌のよ折らぬ秋の目  
赤子も折れぬ秋の目  
折らぬ秋の目  
白く折れぬ秋の目  
淡く折れぬ秋の目  
月の光の折れぬ秋の目  
目にたぬ人の目  
乞食の目

杜  
才  
半  
美  
恒  
兼  
入  
兼  
明  
白  
折  
兼  
折  
保  
若  
斗  
入

題義秋







尾張 圃 曉

れ月さぬとよ子供ホと月見せん  
持子の井を扱あそい月見か

吉元

月の秋

あつや志子共秋をのる月の秋

左然

逢ひてふり出ると月の秋

恒丸

月の秋はさすやこれ虚花か

麻古

花の夜

そろそろいつまで白くわの心

際多

花はふれおの向しをや色し

白梅

いおの心は君と成るの白くか

存正

よれのをて見て隔りたり花の心

榎方

何れの花をさすやし月花か

乙二

こり月といひ白家の花の花

武陵

花

せれうわさるんやうと花の心

吳老

花の心は私ありとけ白くうり

相模女とけ

りり花に嵐吹くうらつ田わ

尋常

お月かろうと花を花を際ぶ

白梅

花は種もとれ身はつとけいん

江戸 葉明

先がくや秋の心を花の上

深海

花をんとつげ花 一 万の首

乙二

いおさけてくふとさうりつ松

道彦

ささ波の地もあそを花の秋

寛松

花こそは袂に黄を心くわわ

常盤

花の心やこれハ二ふさく杜若

一 蕙

題叢秋



松のみに松見あまのり	陸奥	壺
瓶元の占ふ実たり	松の樹	魚
そよこい風を可れり	松の林	蒸子
よま金や門口をこ	松の如	席杖
よまの女やはり	松の如	菊
よまの女や等し	松の如	道
ほつとく	松の如	燿
花折てり	松の如	存
松川やの	松の如	存
松川の	松の如	存
松く	松の如	士

家立て揚れ	田川	標
松川のう	松の如	祥
松川て	松の如	百
左隠秋の名	松の如	平
老ひり	松の如	百
池	松の如	存
中	松の如	保
晴	松の如	存
十	松の如	現
夕	松の如	伯
いろ	松の如	寛

題叢秋







くらりし風と雲あはるふよし  
 物白花はひきまれ日数り  
 小百もめくし融るし花ふよ  
 秋の心と融れて尾ぬれ花ふよ  
 花んとくや秋のまをて花の吸  
 芳こそめてたつや志とよの花  
 松を年れたる月足内じまたか  
 けはたまたをふよしまたか  
 大凡のしまたあてある花ふよ  
 乙子のり花足すしまたか  
 二月のふまたあて志またか

寛松 後物 古静 伊南 兼房 下由 道隣 兼房 乙二 道亮 寛松

檀物花 紫 苑

山をくやあの花をんふ押り  
 懐同土まのしをぬしまたか  
 ちよつとまはさくや風仙花  
 くりそめたをくし一色風仙花  
 新瓦や深木の中に立ぬれ  
 新瓦の根にむきし下草すか  
 新瓦や道つ傍つたぬ六本  
 ありふよのた雨うふあり新瓦不  
 新瓦花の八月の月か  
 葉をちのれ新瓦花のまを物  
 老の眼や赤新瓦花をくし

如九人 上屯 陸奥 寛山 為藤 兼房 百明 一字 月化 寛松 古換 丈多

風仙花 新瓦花

題叢秋







菟の花 三條の十おに居て菟の花  
 花う抱うあまの菟の花の五ハ  
 菟草や洲しとておんや  
 菟の花咲て跡もく小菟か  
 りさけくハ植るけしと菟の花  
 益れしよのありややたのむ  
 うりくと小ふつれはたのむ  
 釣竿にたてて釣るやたのむ  
 菟のまにまし出るやたのむ  
 朝あけしし折て菟草か  
 夕紅と月の果して花か

菟草 対 杜海  
 左来 信丸  
 芳く 弘山  
 鐵新 喜阿  
 幾童 菟草  
 菟草

菟 花先にも居て菟の花か  
 花屋やこの花か  
 折ハおつりて菟の花か  
 折つてもんやうる菟の花か  
 古器の古壺にりる花か  
 吹消したるけり菟の花か  
 地の花うけて菟の花か  
 犬の舌も居り菟の花か  
 松凡の豆ハ杭にある菟の花か  
 垣子居る菟の花か  
 山ハ多る菟の花か

石菟 龜父  
 菟草 國村  
 菟草 桑村  
 菟草 成島  
 菟草 全  
 菟草 全

題菟秋



松花や因と見た人のぼんの家  
見込ハさくらん松の夕メ  
松花に晚立よる中見せか  
松花に陸れ来ぬ日とらり  
おのれうらふあそめさ  
松よりしめておの松うれ  
音方の里にりの守りか  
見らるれりてさうす  
佛さよと松花むく松うれ  
松花うらう松花入りか  
うらり来る松花園の及れ

保吉  
感志  
存亞  
斗入  
大に丸  
士仍  
全  
檜  
全  
道隣  
鶏路

おのそよのそやさうし  
松より出て松花あう  
牛の角たあう松花  
ひり出れはひりうら  
夕風の星あう松花  
まのいハ吹てゆく松花  
まふハ風うらうら  
さう目と見れまふ松花  
山陰のおんあう松花  
松花あうといさうら  
秋ハ風松花あう山の子

桂  
吳山  
米貞  
友國  
完来  
甘谷  
喜牛  
正二  
全  
月化  
道亮



なつくと物書うくまか  
凡そつりの木うつるまか  
氣老てこもふるすか  
投るんた小乳るる人か  
板うら物りのうらすか  
物見いてるやそりまか  
足踏水かみの泊るれすか  
ほすかや木れか小葉れすか  
いふちれん十と起るまか  
いふちれんけり子まか  
まかとほれなるまか

全  
一子  
素葉  
奇測  
核中  
長高  
一葉  
寔松  
岳輪  
全

まよりりまか 山にまよりり  
なまそりまかやまハハの子  
無そりの左刀よりまぶまか  
いふちれんとまかよや山のま  
とまもまかハまかまか  
まか見てほまかまか  
書物まかまか  
業平のゆく先くまか  
まかまか来たるまか  
まかまかまか  
いつれまかまか

まか  
境前  
蕙白  
まか  
才以  
快意  
後物  
書雪  
梅間  
全  
まか







花若何をきく人一沙汰のま  
らふ多れふつらぬふ 花  
花若人の白髪も思ふも  
佐名れふ多るのや花若  
悲つて一ふれもつてふ若  
清と清と雲ふふあひりふ若  
然しふ若のふふふふ  
秋之月月庵にふりぬふ若  
ふふふハ家花うふふ若  
ふふふハおれふふふ若  
房ふ若れふふふふふ若

寛松  
申高  
秋長  
幽喃  
梅間  
若阿  
兼也  
左文  
常陸  
尾指  
誠古

尾 花

さうさつり合りやふ若  
嫩入のつ火を焚やか 若  
一人つ携をさつり合ふ 若  
銀やれ打のれや所ら若  
おけりさつり合ふ若  
素の道ハひららつて尾花吹  
やふや尾花若 若 子若  
いらつくと尾花若のさつり合  
位方ハ尾花若れ若人  
おれ若や若て若る尾花若  
花若も若若て若る尾花若

携廣  
壽彦  
左行  
百何  
霞夢  
白持  
一子  
道彦  
若人  
美若

願叢秋



人里にありてさるる尾花り風 永 其樂  
 房の下の尾花り上り風起る 句考  
 尾花りを綴りとす、画龍坊 中應  
 花りてさるる風いと風いつ 咲  
 花りてさるる風いと風いつ 全  
 花りてさるる風いと風いつ 他力  
 花りてさるる風いと風いつ 闘  
 花りてさるる風いと風いつ 踏石  
 花りてさるる風いと風いつ 斗入  
 花りてさるる風いと風いつ 恒丸

花 麦

花りてさるる風いと風いつ 菊里  
 花りてさるる風いと風いつ 道彦  
 花りてさるる風いと風いつ 泉所  
 花りてさるる風いと風いつ 芝山  
 花りてさるる風いと風いつ 青々  
 花りてさるる風いと風いつ 吾帰丸  
 花りてさるる風いと風いつ 秋長  
 花りてさるる風いと風いつ 本結  
 花りてさるる風いと風いつ 本院  
 花りてさるる風いと風いつ 戸  
 花りてさるる風いと風いつ 葉也

露 花

題葉秋















無是も一畑あてそけのそれ  
 蕎麦刈 下左刈た道りたれ小野の上  
 新そば 新そば中産あて候る樽の音  
 新そば中産小産をとりて取の音  
 美 是そ美も古く人の美はり  
 香根坊 是香根首と入て中業はり  
 木賊刈 杉も家移りたり香根坊  
 初 忘れすも二日おめとく新  
 初 初下貝のより中へつ 花

百籟  
 道差  
 薺左  
 野己  
 白境  
 恒凡  
 彦人  
 又何  
 存亞  
 麦左  
 柳右

初ゆや小松れ中た日のより  
 初ゆに遅れてぬる小魚や  
 初ゆハ癩腐たはうーハ  
 初ゆや芦辺をさして鳴花  
 初ゆに控へてそのやの口の  
 初ゆや杉の下るるほ葉より  
 初ゆや濡れて色より候つら  
 初ゆや巻くよりも帆片も  
 初ゆのちりきり候大わ  
 初ゆに白吹くくちせふわ  
 初ゆに底をとり舞ふをふわ

乙河  
 華市  
 芸路  
 恒凡  
 業兆  
 道差  
 去迪  
 虎印  
 漢酒  
 薺左  
 華市







二百十の木の扱ひ等の先きん  
 二百十の木の扱ひ等の先きん  
 新と書きたる二百十の木の扱ひ等の先きん  
 後彼岸 鹿相子とて通る彼岸か  
 後彼岸 鹿相子とて通る彼岸か  
 田の餅の息つゝ白のひんか  
 田の餅の息つゝ白のひんか  
 放せ云 放せ云の扱ひ河も其也  
 放せ云 放せ云の扱ひ河も其也  
 秋凡ん昔の扱ひ河も其也  
 秋凡ん昔の扱ひ河も其也  
 放せ云 放せ云の扱ひ河も其也  
 放せ云 放せ云の扱ひ河も其也  
 親に有るも其也か放せ云  
 親に有るも其也か放せ云

約 牽 約 牽 やりたりて甲斐の玉男  
 約 牽 の坐のほつれも凡格之  
 約 牽 の坐のほつれも凡格之  
 約 牽 の坐のほつれも凡格之  
 約 牽 の坐のほつれも凡格之  
 出 代 出 代 やりの坐も其也其也  
 出 代 やりの坐も其也其也  
 出 代 やりの坐も其也其也  
 出 代 やりの坐も其也其也  
 擣 衣 擣 衣 此の扱ひは通く其也其也  
 擣 衣 此の扱ひは通く其也其也  
 擣 衣 此の扱ひは通く其也其也  
 擣 衣 此の扱ひは通く其也其也  
 擣 衣 此の扱ひは通く其也其也

題叢秋



目にくる月の裸や小夜砵  
 寺しらぬ里うらうや小夜砵  
 寂夜うらやうや小夜砵  
 旅のきくを風れたるふあさのわ  
 と物とれは七のそり砵す  
 言のつらさる砵の折りか  
 飯菫の砵うらうや小夜砵  
 凡れいて男ハ毒うら小夜砵  
 木乃のの鳴まきしと小夜砵  
 志まゑと寺と寺と砵か  
 ぶとよ砵に丸る砵 葵

全  
 白梅  
 成吉  
 又何  
 仙仙  
 去鶴  
 存厚  
 全  
 大江丸  
 雲江

砵寺砵まきしと小夜砵  
 秋もやたはつ白のき 砵  
 ぶあさの別寺人うらも荒い  
 小夜砵園のりうらも荒い  
 小夜砵月のうらも荒い  
 砵うらも荒い板うら  
 里人の温泉にきてはや小夜砵  
 いさるんの手をこて寺砵か  
 又山とてはれ砵寺か  
 山松やたアのみあさもあさ  
 吹ろふまきしと小夜砵

再城  
 恒丸  
 全  
 士鶴  
 全  
 不梅  
 午心  
 五部堂  
 吉牛  
 一子  
 送毫







木海一く列かかて小戸破  
 多に息子のそを列るるを破  
 多に息子のそを列るるを破  
 山依くおま死もありを破  
 ひろそに乾ぶのせうやうろ氣  
 丁鴨の破くくくる氣 中  
 りしぬ火とあつくくそ破中  
 大泉の常き戸に小泉の破中  
 ぬくあもく戸もあいか氣う付  
 外多る元は改子心破中  
 そにろれくくと破の梅子中

三原人  
 日人  
 武彦  
 一柳  
 東謀  
 季道  
 瓜六  
 丈巳  
 方解  
 小中入  
 李景

葉山子

海山の月れそそ破く外  
 小戸破とそもあろく月の中  
 高れかか破くくくろ氣  
 多る居て海揚きぶくくか  
 人先にやめあのまろくし中  
 高るにれ教さるふかろくか  
 新其のくしう付す表く  
 くしつろるにれも足さるり  
 柳りそぶ人れらうりてくじか  
 老る牙の作りあつるくじか  
 人死もくじの秋ハ後さるら

元代心  
 文彦  
 左弁  
 華お  
 葉左  
 白権  
 保吉  
 存亞  
 士助  
 全  
 恒丸

題叢秋



白子ぬらんんよとつるくーか  
おれくの橋見てまろくーか  
百姓にちんくうてくしんか  
山中や葉山子の氣に時を引  
うらつたけ断くうするくしんか  
まろくしよの山松うれくしんか  
まもくぬ秋やうしのか和兼  
秋風の骨とるりたぐくしんか  
矢にまひを居けもろてまじ  
あれくてもまをさるくしんか  
まろくしよハ七十二ニクハ

米貞  
完来  
午ん  
吉牛  
一子  
道彦  
大阜  
奇園  
乙二  
月飛  
意白

鳥  
子  
鳥あやや糖のつるま子魂  
ちんくうのつるま子魂を海りり  
引あけく松のぬかや鳴子魂  
鳥のちんくうとろくしんか  
まろくのんハまろくしんか  
みまろくうてまろくしんか  
古里の秋とろくしんか  
田のまろくしんか  
くしんくうも村のつるま子魂  
小ひろれに炭材のまろくしんか  
まろくしんか  
鳥あやや糖のつるま子魂  
ちんくうのつるま子魂を海りり  
引あけく松のぬかや鳴子魂

雀子  
石睡  
少女  
中松  
素曲  
兼山  
秋ま  
素院  
又狐  
鳥お  
今  
意左

題叢秋



是を和ふやの蹴てり鳴子や  
松風のわごとくさむ鳴子や  
りぬれ蹴はあけふ鳴子や  
さけしうそ燈を吹ふ鳴子り  
秋もやあに落さる鳴子や  
唄しとたあやうてハ引鳴子や  
世の中や鳴子引てもさくら  
索交る白髪もあはれ鳴子蹴  
勢くやあれたるそ鳴子蹴  
鳴子りく星にろりろりきん風  
ふれやとこの鳴子のむら花

几董  
保吉  
初花  
又鳥  
士郎  
三笠  
米貞  
年人  
祥木  
道彦  
全

鳴子  
引板

鳴子りうそそへ風のふわり花  
人もとれにふたも鳴子や  
を心の白見てまう鳴子り  
松風やうさるの春の枝にあ  
ふ烟や荒もむらもむらう  
ふ陰や遠鳴子をさるの春  
さむさむらう秋の白いとこに  
まのけの秋やれいようさる  
あふことよあはれ入あ夏日や  
人のうら業うらうらうのた  
月れらふ人路さうあふあは

巴河  
後学  
桑木  
梅共  
白権  
華木  
存亜  
善来  
一字  
道彦  
寛松

題叢秋



流 多 紫中の振子と水 流あり 近江 魯白

越前の多と切と流あり 伊勢 豊左

そら大原の尺あり 山崎 白旗

折角のうと流あり 幽嘯

山崎の是ふ未け 几董

流 卓 流卓の標の先に水 葉左

川 金とくさる 葉左

帆のうとよのに葉あり 全

流のよのに葉あり 巽 多我

流子田とさうとさうあり 犯 扇圃

白乞の小町と果やあり 葉左

おくの森の葉あり 全

志で下つて直か小田の折あり 雲路

小そちやや 葉あり 一子

これ居んた 葉あり 三府人

あす流あり 葉あり 又角

流 ちる 葉あり 布席

又山の小長とさ 葉あり 末流

うそそそや 葉あり 不岳

うそそそや 葉あり 道彦

流 転をりも 葉あり 米兵

流のうとや 葉あり 如扇

題葉秋



漸き 藤巾 平氣 子乳 下衣 工  
 物き 二日 木槿 木槿 物き  
 物き の 月消 子乳 白丸 子  
 物き や 子 の 菟 菟 と 何 何 子  
 物き や 子 の 菟 菟 と 何 何 子  
 小笠 子 子 子 子 子 子 子  
 物き の 菟 菟 菟 菟 菟 菟  
 物き や 菟 菟 菟 菟 菟 菟  
 物き の 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟  
 物き や 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟  
 物き や 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟

一葉 六龜 存亞 五葉 道亮 月化 古寸 槐園 一葉 金塔

物き や 木 絨 絨 絨 絨 絨 絨  
 物き や 同 同 同 同 同 同  
 物き は 菟 菟 菟 菟 菟 菟  
 物き の 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟  
 物き の 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟  
 物き の 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟  
 物き の 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟  
 物き の 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟  
 物き の 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟  
 物き の 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟  
 物き の 菟 菟 の 菟 菟 の 菟 菟

梅園 斗白 菟左 全 曉雲 白棧 感喜 又竹 珍石 存亞 恒丸

題叢秋



洞極を氣のくくくおそくか  
幻に子多きくくくおそくか  
横めりの鏡りに来ぬるおそくか  
おそくくくかあて花より空白し  
ある院に暮目下くおそくか  
氣有の路にしうくくおそくか  
ちる老おのそくく同に尺ゆく  
ゆるれりやおそくの心の秋  
白濁の瓦枕にぬるおそくか  
人の来てくれかやそおそくか  
秋ぬる於てぬるおそくか

完来  
氣室  
一字  
末郷  
道差  
全  
一葉  
桂堂  
庭松  
梅月  
末院

洞極に在るの秋喚れり  
戸にさけるまのくおそくの秋簾  
子多きもぬれくくか  
けしうくおそくのむる鏡をぬ  
おそくくやあはくくあの中  
二月の本にさくくおそくか  
井高うくくおそくか  
氣良の玉れにさくくおそくか  
あきくくくくくを譽れて  
あきくくくくくをたす牡丹株  
まにさくく月のちくくもあきくく

陸奥 芳高  
北丹 葉思  
備丹 梨境  
全吉 風宜  
越丹 げ江  
公羽 佳水  
上流 百十  
伊豫 五極  
可成 石鼎  
九花

題叢秋



秋

之

きいそや家の山陰にて暮るは  
延びしそよとありてあそび

越后 長洋  
阿波 菅六

板さくろくや栞大なるの葉  
人争の目さるるそ板さく

尾花 国房

秋空一ふみし板にさう時  
きしとそ葉板や栞の氣

古彦 久城

下

冷

下冷やふたりくるあの方  
下冷や赤中の武彦源光

虫母 菅快

透とともくしてまきあ合と  
夕可しむ下流に七月七十五

紀子 枕山

身

入

あすくやるの身にくむ板はは  
位陰 意吉

秋

日

秋をくす離れるに栞の入りか  
栞日和をさくろくと海りり

白栞 全

秋の日の片つらき山田か  
秋の日の月に遠くて暮んか

存臣 一子

栞りあさくろくろくとわらわ  
秋の日の栞をさくろくと板のへる

平角 岳籍

栞の日のあつたむ人栞板  
秋の日の毎日暮してまつり

幽晴 梁吉

栞の日はさくろくと暮んたり  
秋の日はさくろくと暮んたり

常陸 梁吉

栞の日の暮るるむらぬ栞の暮

尾花 梁吉

題叢秋



秋

お

子嵐のちるるややの秋  
 甲斐虎のしののけの秋  
 秋の赤や緑の氣は屋よりも  
 秋の赤や白くもくもくも  
 秋の赤や白に押あふれぬ  
 秋の赤と人様こゝろに  
 秋の赤の是もはらばら  
 秋の赤や白にけりる位  
 秋の赤は来くる人や  
 秋の赤に枕をぬきぬき  
 秋の赤と氣とまのへ

夢  
 全  
 白  
 斗  
 感  
 外  
 士  
 擗  
 全  
 米

長

お

秋の赤もはらばら  
 秋の赤やはらばらも  
 秋の赤やせはらばら  
 秋の赤の人と  
 秋の赤もはらばら  
 秋の赤の歯に  
 秋の赤に  
 秋の赤や  
 秋の赤や

陸  
 一  
 飛  
 水  
 秋  
 左  
 百

題叢秋



この以ハ嵐もあれぬ長たや  
 長ぶあやあきるる老の波いさ  
 心多の枝ささるる長夜や  
 傘に嵐のつらー長あはれ  
 長ぶあやあきの白ひのまいた  
 戸さあはれ長あきのあはれ  
 舞のまはれりりりりりりりり  
 子のあはれも長あきのあはれりり  
 長あきのあきのあはれりりりり  
 蹴さあはれりりりりりりりり  
 家さあはれりりりりりりりり

伊勢 李石  
 兼左  
 兼右  
 白旗  
 全  
 保吉  
 長要  
 伊戸 梅英  
 兼左  
 兼右  
 如應

秋

兼右やまきーりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりり  
 古くへあきの従来やあきの長ぶ  
 長ぶあはれりりりりりりりり  
 清人よあきりりりりりりりり  
 孫てあきりりりりりりりりりり  
 そとあきのあきのあきのあき  
 大とあきりりりりりりりりりり  
 物あはれりりりりりりりりりり  
 ひらあはれりりりりりりりりりり  
 網の目やあきりりりりりりりり

伊戸 一様  
 下張 祝母  
 陸奥 祖庸  
 板橋  
 乙洞  
 伊勢 汶多  
 兼左  
 兼右  
 白旗

秋

題叢秋



鴨

うー迷へ鴨のありて道にそん  
ゑて、立ハ鴨に於る小菘や  
月をたれたれておる鴨や  
餅をさるの事おや鴨鴨  
いら時に目の是てう鴨や  
ちやおんうれあうり鴨  
眼とてまら鴨やそれまの事  
翁 鴨自らをさるる瘦め  
鴨立て秋天はさうあわ  
人婦に鴨鴨てあうりか  
うり流に追れてさう鴨の娘

又  
全  
士  
道  
著  
陸  
文  
柳  
琴  
白  
燒

流新の鴨の隠まてさうり  
鴨の来て自らさうり  
鴨立て秋ハ指引男うれ  
あまの極まり鴨の立てり  
おうれて又立鴨もさうり  
うりや鴨の子れり翁の事  
鴨の事さうりさうり翁の事  
弟又控ハ鴨の立りなわわ  
あつあつ翁さうり鴨の事  
子外や枝れさうり鴨の立  
鴨鴨の子れさうり翁の事

跡石  
斗入  
大江  
恒丸  
士郎  
全  
去  
樟  
米  
氣  
尊



たぐぬ鴨ハ氣もあつて鴨の  
鴨に月のとく氣氣に日暮る  
鴨鳴てるくこむもあつた  
鴨鳴て下りてたつた  
鴨鳴て下る者ありそ大中  
立鴨や氣うゝるようけ人  
小田の鴨目とふふも足  
鴨の立瓦ん灯のり縄ふか  
けりくとこしむりなり鴨と鴨  
足先又鴨やあり清のそ  
子とるあつた費火や百の鴨

大阜  
尺丈  
道彦  
子敦  
奇剛  
一葉  
雲権  
常笠  
三休人  
養老  
仙舟

燕

歸

立鴨のあつた風もあつた  
鴨子見て鳥乳か左下花う乳  
目と氣中に鴨たつた  
立鴨をさすともりやとりか  
やの昔もろく立鴨をあれは  
乙子や鴨うりれハ秋をや  
燕の氣内あつて歸るうり  
新戸探る人ともろく燕う乳  
燕けて秋ハ佛う成たり  
乙子の鴨ハ後も足さうり  
あつたハ鴨をうり候

助董  
長洋  
壽樂  
兼所  
左笥  
深袋  
月化  
寛松  
瑞三  
左笥  
秋波

題叢秋



鶴

省美代の子代の敷うえ鶴雀

乙二

初

初

その後に産むる山田の鶴雀

鶴雀

初アや後にもおろすおろす

女子代

初アや多ててくまきいもの

鳥磯

初アや昔史にそむく登る鳥

鳥磯

初アやまよふいそふの鳥

鳥磯

初アやとるハ得らばりーら

斗入

初アや之のんぶれおの草

石系

初アやうらぶ洲と有るおん

糸衣

初アの身えさる葉是か

舎乙

おろしうらぶ 初アのおつか

雁

湖の青初アとまき出たより

士鳥

初アハ元とまきの鳥えより

鳥磯

初アのおろす鳥えより

鳥磯

初アや磯の松子見ゆるゆへ

鳥磯

初アやそれと葉の鳩の鳥

鳥磯

初アのそらたりや海の上

鳥磯

初アの鳥すむ鳥とまきの鳥

鳥磯

初アと見送る葉の鳩の鳥

鳥磯

初アや葉とまきの鳥の上

鳥磯

初アは鳥にまよふる鳥の上

鳥磯

二羽とまよふて鳥ーア

鳥磯

題義秋



玉有りとは人の心は若れ草の丁  
に大男りの立へて小田の丁  
いぢいこの心は若れ草の丁  
若れ草又吹あつた草の丁  
まゝの丁大なる心は若れ草  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁

全  
白旗  
保吉  
跡石  
全  
去崎  
斗入  
全  
存臣  
士郎  
全

丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁  
丁の心は若れ草の丁

全  
恒丸  
麦二  
柳莊  
長翠  
全  
榮光  
成貞  
全  
可翁堂  
全















鵲

本つゝふの目りおらんく本男の  
 物鳴く凡獲ふ本の方わ  
 打のれの小舎る物同くわ  
 敷法中卵の壳に物鳴  
 子とくゝ色はわしとる物の  
 物鳴の跡に入らへんわ  
 物一冊書てふ事な守帯わ  
 とく一冊して物に物鳴  
 とくささま後さへ一物の鳴  
 物の事後の変書と都にす  
 物鳴や天狗の杖のその本末

樽也 園子 白権 吉菴 在亞 葉北 乙二 道彦 全 月記

物子賛  
 左刀魚  
 鰻

物鳴やゆかゞ核原れへたて垣  
 物の事いつまゝやのそくさる  
 物鳴や改め来るそくさる  
 物鳴や杭本なりりのタガ  
 物鳴のやまゝのやうる物の賛  
 左刀急や流のむとる岩の上  
 左刀急の壳ハ早んて守りり  
 物鳴守りりつゝ子散か  
 不其と守人よやとむりり  
 かけ鳴星の条のりりか  
 物鳴の事んそくさるか

瓜 麦 菅 鳩 保 孫 梅 園 白 斗 釣  
陸 下 陸 陸 陸 陸 陸 陸 陸 陸 陸 陸







崩

築 山凡个々も岩くく築大と

とやうく山も流り岩築

れそんくお岩の崖肩や岩築

入や中や凡凡瘦了蛇の穴

蛇入穴 鹿

しん水手沸しつる尾ハ蛇跡

あもすうろまて蛇のしん水

しん水手あつたは河を越え来

たのれ子喰お岩のきしん水

鳴止てしん水つり苦るわ

お山やま築やよりしん水を

めわしん水岩の目の光わ

上中

麦

後物

柳

標

石

岡

今

左

焼

瑞

之

巴

後

柳

標

石

岡

今

左

焼

しん水の尾ふまにうら

山その登くしん水のしん水

周れたへて西酌はしん水の鳴

ゆるしん水の霧にすくおん水

急しん水の平外標の枕を

おあしん水のしん水をけしん水

之交鳴て周る尾をくおん水

しん水の平外一軍と標をけしん水

あしん水のしん水をけしん水

急しん水のしん水をけしん水

鳴しん水のしん水をけしん水

今

今

今

今

今

今

今

今

今

今

今

願叢秋



夏山に故きき守小し  
しるそ昔火に守守歌  
しるそん死たしるそんか  
山端の時るに止しきれき  
ひるそりくしるのり  
佛しるそはしりしるのり  
凡そしるそはしりしるのり  
獵男らら火に守守しるのり  
凡そしるそはしりしるのり  
麻衣て素るしるのり  
そはしりしるのり

全  
書  
二  
斗  
入  
乙  
固  
其  
六  
恒  
凡  
全  
士  
均  
全

○百廿一

ゆきて懸しるのり  
はしりしるのり  
入りしるのり  
葉刈てやしるのり  
るそりしるのり  
しるのり  
そはしりしるのり  
吟しるのり  
秋しるのり  
しるのり  
周のり

全  
女  
中  
也  
三  
葉  
光  
標  
也  
叙  
来  
三  
顧  
完  
来  
可  
来  
全  
三

題叢秋



しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり

一子  
全  
尺艾  
道亮  
全  
全  
養地  
去築

しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり  
しつとつといひつて成く成たり

岳籍  
乙二  
全  
塊首  
去卿  
雲権  
瓦全  
二座人  
松半  
一葉



しものや又天よりとたふり  
掉しものめふあきて来る烟か  
鳴しつらこつるまのは病まか  
良抄ど物に河越りしは端  
道の娘のうけけ兼る平どめら  
しんれあこるるれまれ志を肉  
完一何あつあつうのつれん  
しつてしんるるにうりたり  
るのしん短く聞て過りたり  
し聞てしんりしとふ人の良  
しつて平並受てしんるの道

學笠  
蕉白  
後物  
秋久  
漫々  
幽嘯  
秋廣  
其末  
曰人  
棠也  
鳥翠

しものやのあためれたるあやが  
しつて杉のえをさるるりたり  
一筋れんやんてしものま  
こまし平目も先もあれうた  
あしまた里人の中秋のし  
鳴し平よの何角の商もさて  
しものや枕をうたは海は鳴  
急しれ波をうたうて岸りたり  
白のしんあを聞たしつるあ  
服ふしげんあしんるあ  
大凡のあよの良かやしんあ

閑古  
一蕙  
柑翠  
双湖  
籠嘯  
臨海  
古毫  
視六  
嘴笛  
末一  
寒秀



麻

笠

あちこちをたずねて  
ひりやうふをたづねたり  
戸をたたくてきこえん  
到て来りて名をたずね  
しりたをたづねて  
あちこちをたづねて  
たづねるとあちこち

因幡 南溪  
兼お 李仙  
致何 良徳  
陸奥 文園  
河内 雪丸  
左弁 瓦全

枕流波白歌集歌下

極上左弁将

九

日

あちこちをたづねて  
南をたづねて  
いよこをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて

武系 雲左  
陸奥 石上  
美濃 美濃  
九郎 海  
道彦 道彦  
万和 万和  
後物 後物  
秋拳 秋拳  
都産 都産

題叢秋

重

陽

あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて  
あちこちをたづねて

都産 都産















赤葉のあはれをさす一午の白  
赤葉や葉はこれやも懸れ  
葉はまた後れすのう葉か  
り枝の葉をかきて葉のふ  
れ多ぶ吹りくく葉は  
葉にこそ豆着もつれ山に  
投葉も市の白葉奇麗に  
たやすもかり入り葉の中  
見たりし人の心や葉は  
白葉といふは佳くもれり  
白葉は折れ添ふ葉はくもり

長翠  
見直  
米貞  
全  
完素  
少麗  
菊生  
菊三  
屠龍  
堀河  
大阜

ありとある葉はくもりて葉はふ  
浮刺やとふ葉の葉の出葉を来  
同やや葉吹よりれは世す  
葉のまはれあはれはくもりて  
葉をれは位あはれは葉のふ  
子代のなりむりては葉はふ  
酔に山路は葉を折り  
傘をては葉は子れ葉はふ  
雁をよと殺れは葉は葉の花  
赤いとて葉はくもり葉の  
白葉やまかりくもり

一子  
月化  
道差  
全  
全  
月花  
伊勢  
繪波  
乙二  
全  
全  
定種







山登来て葉のあふふ心狭か  
月よりらん風から葉たのこり  
ふくふくをぬかぬもつて葉花  
白葉の上をぬくもつて花の出来  
白葉た力一とつては咲たより  
人の来つたけりもつてや葉花  
秋のふきこつてはしらす葉の心  
たつたれ白葉たふと成たより  
牛馬もや勿狝るも葉た上  
夏折来つ葉はらんれおの真  
心はらんれ白葉の風枯か

桐栢  
女志守  
瓜  
冬斐  
米老  
北原  
箱歌  
心  
芦丸  
か  
作  
夏  
尼  
志  
月

花のりお色や心ぬれ葉の心  
撰層の厚きゆり葉の花  
心ぬれぬ葉もつて人のぬれ道  
松林の真折もつて葉花  
心はらんれ葉はれ花のあつては  
葉花より葉た名はしとふと並  
葉の文の白湯もつては産にわ  
人去てをりけりや葉た花  
花の死ぬる日はありたり葉花  
白葉た隣りやてある心ぬれ  
葉のしやるりの葉やや葉花

又里  
秋左  
自考  
如尼  
又道  
五河  
柱丸  
斑車  
木老  
應行  
底古



菊の花を奪れたる人の中後一  
寂ハチ左赤下んあや心の菊  
ゆりもさして是た一菊の花  
白菊の供けりたりり人  
造作らうも菊は有る心後か  
大菊や咲きさうりて横日さ  
心の菊ははたて菊の秋  
ありふれ一菊咲かや子もあ  
子も菊ととにさくらん菊の花  
流にゆい日もしきく菊の心  
いろくの菊やたはけ七小町

斗牛  
下品 鏡  
伊勢 男作  
又喬  
橘  
桂心  
養女  
伊勢 年堂  
但馬 雪屋  
唇路  
仙玉

菊 菊 菊  
下を後や花り菊の花の心  
十日 菊 冷さはや十日の菊は碑の心

紙

くまをさやおのふれあを菊の心  
疎とあやふの心の菊の心  
白菊にありさうり十日か  
疎菊や流木りさうり後のお  
崎凡やいふ菊はあて初五を  
人の心や花さふ心の初五を  
初五を流意菊の使くれ  
初五をさうりあはくもさうり  
来てはれハ下をささて初五を

世  
竹童  
代志  
可初堂  
道亮  
雪屋  
去路  
保吉  
赤衣  
存亞  
麦宇



五  
五

松のこもあはし一ふに初五を  
鳥見の鳥の飛と初五を  
五を元や鳥あつくと風と  
わりの木を斤と所の鳥五を  
ちとよとまきあつて五をわ  
五を元平用と一と一筆二本  
五つち田に五をあつくと日わ  
人あしの海とあつと五をわ  
松のこもあはしとよとまきあ  
浮きとの五をにけつと尾とわ  
り五をこのあつと尾とわ

木卯  
樹中  
園更  
合  
百得  
尋木  
合  
蒼古  
悦家  
月鏡  
合

但了

とくりに尾との五をあつと  
あつとくとの初と五をわ  
初との心まの樹と五をわ  
ふつりのまつと尾と五をわ  
尾と五を梳と子ハのめと  
弓提て一星と五をわ  
五をあつと他と五をわ  
く子との素と通と五をわ  
二と五をわのあつと五をわ  
幾と守人と五をわ  
あつと海と五をわ

常陸

保吉  
感喜  
合  
又遠  
去臨  
重厚  
祇燈  
大江丸  
存亞  
恒丸  
書塚



やうしりまをたれらるやけり  
久をまをたれらる人ともりり  
海りまれはあにありくをまや  
凡つたれは氣に入ぬ深をま  
素木つて心置人古きをまや  
茂をまよふ深のきのまらり  
古器の香にけくをまや  
五をまや茂をまらる并有  
灯ともまは松にまさるをまや  
すまややまをまを深のきの  
そにまて花よふ山や久をま

五葉  
道徳  
土助  
丈左  
白麻  
袴中  
成兵  
子助  
全  
道彦  
養丸

白をのまハ花の山をま  
さまられはけけ換はをまか  
横をまをまをたけの茂をま  
あまらるりてのまをまか  
山道やえもまれぬ木まをま  
この花ハま月のあまをま  
世の中のとまらるるをまか  
紫まらく女し居しをま  
五をまら木まら中の楓苗  
花ハひつるまをまを木のとま  
氣をまのまをまらるるをまか

白化  
一葉  
奇則  
夢  
雲松  
雲河  
桐  
孤山  
芥坡  
尺達



立退て見ても方うむるまわ  
 石海  
 人の子のへる屋と赤ぶるまわ  
 美南  
 老道心のまわりやむるまわ  
 逸鳥  
 るまわてゆれかゝるまわり地わ  
 玉光  
 栄道てれまの備へるまわ  
 未接  
 むるまわ付あはしてるまわ  
 柳起  
 あやまつて見れまわるまわ  
 路十  
 夕暮をいふまわけてるまわ  
 丘盛  
 井つてふまわらふまわ  
 魚舌  
 やり悪てもまわらうまわ  
 一境

考るまわ  
 甚化  
 名をすぬまわつて考るまわ  
 年人  
 何れまわに動も漸く考の白  
 雲境  
 久すの足つて考の根  
 芽丸  
 楓るまわ雲の疎も楓のるまわ  
 風吹  
 柳るまわ柳も尾舟比の名もり  
 恒丸  
 楓るまわ晩清のまわ守楓るまわ  
 大嶺  
 白根木るまわらりまわにわてるまわ  
 左流  
 漆るまわまわに流るまわ  
 不知他者  
 合款るまわ築ちるまわ  
 後物  
 枿るまわらるまわ  
 枿磨



橘を在 於五交兼くふりの山打りて  
 子も在 子も在 打ちの山打りて  
 まりりし妹の娘のや子も在  
 鶴の子の尻の娘のや子も在  
 又子の山打りて子も在  
 有る且交 已たさひちるあり 山の夕も在  
 久の山打りて大歌くも在  
 不愛久松 鳥の山打りて松の夕も  
 有るも 迷守松の 男あり  
 子も在 子も在 夕の松  
 深久の中にまきり松あり

存 無  
 長 葉  
 奇 劇  
 与 三  
 中 中  
 丈 左  
 完 桑  
 加 十  
 女 子 川  
 葉 左  
 知 廣

銀 杏 葉と深め久か冷たり 庭の松  
 汎杏ありてくくん児の山打り  
 夕暮の山打りて 子も在り  
 丹山 夕の山打りて 山の山打り  
 いく節も戴り 松あり 山の山打り  
 末 松 や 幸 介 自 足 了 深 の 木  
 末 松 や 月 の 表 ぐり の 表  
 末 松 の 中 に まき る 子 荒  
 末 松 や 坪 あり 裁 せ の 子  
 末 松 や あり たり づる 地 の 後

我 溝  
 葉 介  
 胡 兔  
 葉 左  
 元 徳 丸  
 葉 介  
 末 仲  
 葉 左  
 一 山  
 白 礎  
 焼 土







志とあんとするやも有りはの月  
 はの月らふり喜ぶを半か  
 旅りけいさきよの雲やはの月  
 はの月すこしうらやま  
 川くやまふりてははの月  
 晴つてあんなにありははの月  
 覽ハきよの雲やはの月  
 老ふけり人ハ流くはの月  
 はの月秋ハ平ぶあのをわ  
 はの月演子の小橋なるん  
 人の男にみりしひえははの月

橋 左  
 合  
 左 明  
 覽 左  
 公  
 書 左  
 白 待  
 希 云  
 存 西  
 石 蘭

和れくと兼葉の里やははの月  
 松に晴る月のあかりはの月  
 はの月いんも古ふはの月  
 はの月の秋跡来やはの月  
 はの月丁大をりはの月  
 はの月むも海に 橋 たる  
 とあつてはの月やはの月  
 はの月長きよの 氣 け  
 はの月海大来やも名跡や  
 はの月ふもえぬはの月  
 たるはの月

恒 元  
 公  
 橋 左  
 士 釣  
 来 貞  
 書 悠  
 完 来  
 白 飛  
 名 跡 左  
 合  
 為 之



月と月とそれなりをてはの月  
やうなもこのおふありはの月  
るよの花ええやのむはの月  
くちしめ秋のあまやあは月  
ひもけりてあまきあまの月  
はの月心置ちううるるそん  
はの月片舟おしーそんわ  
はの月くちあまうかまのりわ  
ふ越いさよんのもうよんのは  
はの月まき提柳のまはちるん  
白あはあもつうーはの月

月記  
一子  
乙二  
養丸  
全  
道亮  
全  
月天  
持堂  
平角  
素染

おれそくこにうへてはの月  
豆引ておのそくお月見  
鴨まゝ立てて右マの月の月  
らぶおとすく売も信れはの月  
はの月こりりくもふけぬや  
はの月こりのつも提てある  
飽まのぶらんとまらうあは月  
念まゝ古のうくははの月  
まゝとす原の力やはの月  
まゝのりれすの月とるるとあや  
十六おあまのまゝ月と小さ

全  
身原  
申高  
常盤  
寛松  
煮白  
三府人  
幽晴  
兼也  
真也  
猫  
従原







秋	秋	市	星	月	日	名	秋
初秋の白にぬれたる葉よ	次郎吉くえ候いそへ候よ	近よや作く神代の書書所	毎水灯のまにしつむや早自夜	近よや作く神代の書書所	近よや作く神代の書書所	近よや作く神代の書書所	近よや作く神代の書書所
一葉	車馬	年他	葉市	駿馬	葉花	復物	覽書
白旗	乳樂	寺市					

新	酒	是	也	や	新	酒	の	中	の	名	秋
新	酒	是	也	や	新	酒	の	中	の	名	秋
一葉	車馬	年他	葉市	駿馬	葉花	復物	覽書	白旗	乳樂	寺市	

題叢秋







枿

志の北にまゝさうさうに侍来れ  
 枿のこの高初てより雨の白  
 高枿の青をれそはす中り  
 高枿の青をれそはす中り  
 枿のまやの鳴る風とあり  
 まのまて可め枿の木まわ  
 心置や解れ荒るれ枿赤し  
 鳴にまゝ心懸き一枿の色  
 枿の色を心松もまゝとれ  
 枿赤のいとまゝするは赤か  
 人の来て侍は高す雨の枿

朱良  
 半日  
 尺丈  
 嘉樂  
 七カ  
 鞆丸  
 保吉  
 楳吉  
 如毛  
 葛三  
 常笠

熟

枿

枿の木に階子けたり二方の  
 夕てり此まると区入や寂の枿  
 枿ひつとく人控さるる馬  
 高鳴りそを枿さるる山泉か  
 熟枿すまをとり人の熟  
 枿の甘きへん能よま時暮か  
 浣枿やあつとそ見るん  
 浣枿や霜押めさるる手  
 浣枿はさすも暑りし馬か  
 浣枿や涼もへまをちつた  
 於四娘のんまうや枿の浣

阜池  
 枿石  
 沃我  
 國丸  
 明之  
 親道  
 為文  
 百礎  
 二柳  
 策兆  
 子初生

題叢秋







善哉子 ぼんいやんふふふふ  
 菜 蔓 菜蔓の本れ志それてたつお方か  
 破心个菜蔓於ふ子の種 狭  
 心菜蔓に身て高たつふふふ  
 半高う菜蔓きそふふふ  
 小免も高世に高ふや菜蔓の陰  
 南天実 菊ての實やそふふふし物の中  
 心 柗 枚後り一敷のちこや心柗え心  
 本 実 於ふふふ木の實連にのそふふ  
 細工もろふふふ木れ高花流の菊  
 西必の科もろふふふ木実か

伊 隱  
 百 狩  
 幽 晴  
 文 左  
 可 廣  
 久 臧  
 十 井  
 乙 二  
 士 的  
 百 確  
 覽 系  
 井 眉

梅 娘 折そふふふふふ梅れふふ  
 梅れふふふふふ人に花を可れふふ  
 えんふ実ふふふふもあは梅れふ  
 身ふふの翅に居そふふや梅れふ  
 よふそれふふふて新 梅れふ  
 同ふふふの女ふふを梅れふ  
 常ふふ実 常ふふの實そふふ初ふふふ  
 子 実 常ふふの實そふふ初ふふふ  
 牡丹根ふ 牡丹根に根に根に牡丹中  
 蕙 子 蕙の子ふふふと新に然ふふ  
 一の子忘ふふふもそふふ

伊 隱  
 百 狩  
 幽 晴  
 文 左  
 可 廣  
 久 臧  
 十 井  
 乙 二  
 士 的  
 百 確  
 覽 系  
 井 眉

題叢秋



新 獲の光りてつとむく白んわ

新 獲や雲のけけ目の日に疎ふ

ありて中一新獲る人と流来る

日んたりの新獲も嘆くとるんは

思 子 かりんを業子のいれ部

万 年 去 ありて来るとり穿老母子か

吾 亦 有 木のけや白の磁をけれこれ

は秋もこれとるよとんててて

吹風ハ舞にこれとり地 掬

芦 花 芦孕むりり一つとるよの道

蓮寸

悦系

乙二

梅仙

玄秋

白羞

杜新

白確

漫

又鼎

護物

芦 穂

ふあそけり先きり一芦の心

きよや芦の白穂れをいこ

芦の穂に雲とるれす 雀 小

豆 引

豆引とるよや子にとるんは

豆 引 豆 引とるよや子にとるんは

豆 引 豆 引とるよや子にとるんは

豆 引 豆 引とるよや子にとるんは

松 茸

松茸けとるんはとるんは

松茸けとるんはとるんは

松茸けとるんはとるんは

松茸けとるんはとるんは

之及

白確

道差

白確

表丁

枕山

甲乙

等木

保吉

士助

玄院

題叢秋















秋の茅 陸橋の岸もさして秋の夕  
 毛たぬといふの心まゝ秋の光  
 あらう向に鳴もまた秋の  
 峰に夕に杖をたたり秋の夕  
 踏りて人に足さるる秋の夕  
 きのつげいとも通らず秋の夕  
 暮のまのふに心や秋の夕  
 魂を空よ男とめ秋の夕

又 得  
 希 云  
 春 亜  
 兼 左  
 全  
 兼 右  
 全  
 白 龍  
 全  
 初 光  
 保 吉

秋の夕の入りてはすさよわ  
 葉よりそよふも秋の夕  
 けといそ人まのいそ秋の夕  
 人しうたそ水も秋の夕  
 子の馬や町も秋の夕  
 海山や月も秋の夕  
 秋の夕おりの光も秋の夕  
 あれなるいれも秋の夕  
 よの月も秋の夕  
 りの夕も秋の夕  
 たさういそ秋の夕

岱 吉  
 斗 入  
 白 園  
 皓 左  
 恒 左  
 全  
 松 左  
 士 左  
 左  
 左  
 長 翠



この頃の事々も故の夕々か  
故の所のゆれはおよそ夕々  
旅の事々も故の夕々  
故の夕々事々も故の夕々  
秋の夕々一か長ぶ有毛か  
柳の木と二度も故の夕々  
首松ハ松にいつる故の夕々  
橋も夕々人の夕々  
旅の送らハ松とれ故の夕々  
志々やあれしいつこの秋の夕々  
故の夕々事々も故の夕々

橋也  
全  
兼也  
丈方  
事感  
米良  
全  
夕  
子共  
一子  
城也

意れ夕々やゆて夕々  
夕々夕々夕々夕々  
旅すれハ夕々夕々夕々  
夕々夕々夕々夕々夕々  
旅たて夕々夕々夕々  
故の夕々事々も故の夕々  
一益の益夕々夕々  
夕々夕々夕々夕々  
故の夕々事々も故の夕々  
秋の夕々事々も故の夕々  
故の夕々事々も故の夕々

岳松  
夕々  
全  
夕  
兼也  
道差  
無々  
兼也  
夕々  
橋也  
兼松



松をよせ人の送りぬ故の夕  
 うろくと人にせれて秋の夕  
 けり故やまをうろくと故の夕  
 故の夕をひ見て立人七ちろ  
 洲一と平石板落る故の夕  
 をひや篠の暮るれ秋の夕  
 越て暮るひに風をじ故の夕  
 やうらの暮るひに秋の夕  
 立あくる夕のちろくや故の夕  
 ゆるひにやうらに暮るや秋の夕  
 指とらひ酒向をれ故の夕

少女 一葉 雪舟 蕉翁 方竹 唐人 岸池 吳老 梅石

花に輝ぬ夕のふと故の夕  
 桑の桐も見てやれ秋の夕  
 長崎の尾のすくやや秋の夕  
 折りし夕をよのひて故の夕  
 うた夕の故や人に人の夕  
 系信を仕舞流しや故の夕  
 立ひよと松まのいろ夕秋の夕  
 秋の夕に流る夕のよそ流る夕  
 あか人に夕といふや秋の夕  
 故の夕よの夕をいふ夕  
 むつりい流に流る夕故の夕

双鳥 朱阿 芸池 故丸 秀初 李系 桂丸 若白 藝池 葉素







才を掩れつゝる泉あり故の心  
枯く久しふ秋をそよ風折の心  
仲ろふそあつりに於る故の心  
花伝てる物さ秋の心  
見て五風ハちそそ故の心  
園ちの持の先より故の心  
函ちそそあけ秋の心  
泉ちつゝ戸の口とて故の心  
故の心そそあけくたそんたり  
藪心の故そそあけくたそんたり  
おまろふつゝ戸の口とて故の心

恒元  
士郎  
長翠  
樺中  
石部金  
乙二  
日記  
道差  
寛松  
三府人  
田人

秋 故  
海 中

陸中くハ猿てもあはし故の心  
人をのりそりあそ手折の心  
故の心物日あてあそりそれ  
そものまはあてゆん故の心  
今時てあそそあそり故の心  
日のあはしそく一秋の心  
おまろふつゝ戸の口とて故の心  
秋の心そそあけくたそんたり  
故の心そそあけくたそんたり  
幸心そそあけくたそんたり  
釣糸のまらに近一秋の心

一岸  
去光  
戸笠南  
元出 休越  
泉凡  
陸奥女 飛丸  
葉木  
若三  
大阜  
木老  
咲翠







り都や定ハ氣にあらハ然  
り秋ハ葉のふとら  
り都に三ふりし尾花  
ゆづ都や粒ものこと  
り都のゆより  
り都やひりハ葉のと  
り都の鳥陸  
葉大根のり  
り都のり  
り都のり  
り都のり

書  
感  
全  
恒  
士  
全  
長  
米  
月  
虎  
真

り都や葉のふとら  
り都に三ふりし尾花  
ゆづ都や粒ものこと  
り都のゆより  
り都やひりハ葉のと  
り都の鳥陸  
葉大根のり  
り都のり  
り都のり  
り都のり

全  
塊  
道  
桂  
一  
長  
全  
三  
等  
漫  
本











り先七情 下秋の身へ来り  
 萬椒枯投りや嘆きあり  
 片をきし 只路のそむのふ  
 情 下秋 こそまくの 藤花の  
 芳代や垣に 朝鳥松と号  
 心吹の嘆ても 娘の 春 くれ  
 こそとん 娘は 夢たふと 心は  
 破るは 秋に 大なる 風 也  
 白髪し 々 娘に こそと けし  
 娘は 世の 寂たる 中 下 鴨の 身  
 氣とる 下 藤と あり けし けし

大和 憑目  
 對心  
 武秀 双鳥  
 由比 土 鳴  
 女 寺 々  
 孤 山  
 又 角  
 一 阿  
 左 文  
 足 差  
 村 廣

何れも 越て 立ちり 娘の色  
 夢も 一 麻 あり 下 大 秋  
 情 下 秋 こそまくの 藤花の  
 芳代や 垣に 朝鳥松と号  
 心吹の 嘆ても 娘の 春 くれ  
 こそとん 娘は 夢たふと 心は  
 破るは 秋に 大なる 風 也  
 白髪し 々 娘に こそと けし  
 娘は 世の 寂たる 中 下 鴨の 身  
 氣とる 下 藤と あり けし けし

流石 祇 杖  
 近江 茶 人  
 京 十 壺  
 越前 二 川







